

授業科目名： 日本史	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 戸川 点
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・日本史・外国史		
授業のテーマ及び到達目標 日本史（前近代史）の流れを学ぶ中で日本史に関する基本的な知識を身につけ、歴史的なものの見方などを深めていく。			
授業の概要 原始古代から近世まで歴史の流れを追いながら時代のとらえ方や重要事項、研究動向などを解説、紹介していく。史料の調べ方、文献の探し方なども随時取り上げ日本史に関する専門性を高めていく。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：日本前近代史入門～ガイダンス 第2回：原始の日本～旧石器、縄文、弥生時代 第3回：ヤマト政権の発展～古墳、飛鳥時代 第4回：律令国家の成立と展開 第5回：平城京の時代～奈良時代政治史の流れ 第6回：平安王朝の成立と摂関政治 第7回：摂関政治の展開と武士の成長 第8回：院政の成立と中世国家～平安、鎌倉時代 第9回：鎌倉幕府の成立 第10回：鎌倉幕府の展開 第11回：南北朝内乱と室町幕府の展開～南北朝、室町時代 第12回：戦国の動乱から織豊政権へ～戦国、安土桃山時代 第13回：幕藩体制の成立と展開～江戸時代 第14回：日本前近代史のまとめ 定期試験			
テキスト なし			
参考書・参考資料等 宮原武夫・山田邦明・深谷克己（2012）『日本社会の歴史 上』大月書店 木村茂光・小山俊樹・戸部良一・深谷幸治（2016）『大学でまなぶ日本の歴史』吉川弘文館 戸川点（2023）『平安時代はどんな時代か』小径社			

その他適宜授業内で提示する。

学生に対する評価

筆記試験 70%、リアクションペーパー10%、レポートまたは小テスト20%

授業科目名： 世界史	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 松岡 昌和
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・日本史・外国史		
授業のテーマ及び到達目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・歴史を学ぶことで長期的で広い視野を身につける。 ・異なる世界を知ることによって異文化に対する理解を深めていく。 ・歴史上の資料や記録を読み解いていくことで、情報に対するリテラシーを身につける。 ・さまざまな歴史観・世界観を知ることによって批判的な思考をできるようにする。 			
授業の概要			
<p>現在は過去の積み重ねの上であり、歴史を知ることが現代の世界のなりたちを知る上で極めて重要である。本科目では、古代から近代に至る世界の歴史を扱うため、細かい知識の修得を目的とするものではない。むしろ、歴史の全体像を俯瞰することによって、歴史的なものの見方を学び、現代の世界に対する多様な理解をできるようにしていきたい。学期中、数回ミニレポートを課す。</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：なぜ世界史を学ぶのか			
第2回：古代文明・古代帝国と地域世界の形成			
第3回：地域世界の再編			
第4回：海陸の交流とモンゴル帝国			
第5回：フィードバック回(1)・「歴史する」ことについて考える			
第6回：近世世界のはじまり			
第7回：大航海時代			
第8回：アジア伝統社会の成熟			
第9回：ヨーロッパの奇跡			
第10回：フィードバック回(2)・近代と「伝統」について考える			
第11回：近代化の広がり			
第12回：「ウエスタン・インパクト」とアジアの苦悩			
第13回：帝国主義とアジアのナショナリズム			
第14回：まとめ			
定期試験			
テキスト			
大阪大学歴史教育研究会編（2024）『市民のための世界史 改訂版』大阪大学出版会			

参考書・参考資料等

長谷川修一・小澤実編（2018）『歴史学者と読む高校世界史』勁草書房

佐藤昇編（2018）『歴史の見方・考え方: 大学で学ぶ「考える歴史」』山川出版社

リン・ハント（長谷川貴彦訳）（2019）『なぜ歴史を学ぶのか』岩波書店

その他適宜授業内で提示する。

学生に対する評価

筆記試験 60%、ミニレポート（2回程度実施）40%

授業科目名： 地理学概論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 相馬 拓也 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・地理学（地誌を含む。）		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>地理学とは、文理の垣根を超えて《人間と大地のつながり》を追い求める学問です。そして、単なるデータ収集や分析にとどまらず、人類社会の課題に立ち向かえる「はたらく学問」でもあります。本講義では、古代の地理学の成り立ちをはじめ、人文地理学と自然地理学の双方のテーマから以下の学びを深めます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ❖ 「学問の母」ともいわれる地理学の分野横断性・応用力・汎用性・学際性を学習します。とくに、世界の自然環境・民族・宗教・先住民・紛争・ジェンダーなどのグローバルな現代的課題について、自らの言葉で話せるようになることを目指します。 ❖ 世界各地のさまざまな環境問題と社会課題のケーススタディを学習し、地理学的な解決方法を導き出す能力を養います。 ❖ 地理学の得意とするフィールドワーク、データ解析、文献収集、インタビュー調査などを統合した、実証的手法を文理融合で学習し、あらゆる分野に応用できる方法論を習得します。講義を通じて現代の地球や人類の抱える課題に向けて、地理学を通じた自分なりの解決策やコミットメント・発見・気づきを得ることを本講義の到達目標とします。 			
授業の概要			
<p>本講義では、人文地理学と自然地理学の双方のテーマを学習します。地理学から派生した個別の分野を各講義の主題としつつ、グローバルにケーススタディを学習します。</p> <p>講義は、地理学の成立について（第2～3回）、人文地理学的アプローチ（第4～8回）、自然地理学的アプローチ（第9～12回）、地理調査法（第12～13回）、の4つのカテゴリーを設定しています。自然地理と人文地理という枠組みを理解しつつも、文理の融解したリベラルアーツ性を重んじた構成で進めます。また、地理学と隣接するさまざまな学問分野と社会問題・課題も統合し、あらゆる分野で有益となる地理学的思考力を養います。</p> <p>本講義はアクティブ・ラーニング形式の講義を採用し、冒頭で講義担当者から問いかけや質問票を配布し、参加学生はこれに必ず答えるようにします。学生には適宜、記入内容の発言や発表を予告なしで求めます。また毎回の講義の最後には、履修学生はリアクションペーパーを提出頂きます。疑問や問題点・気づき・発見などを記入いただき、次回の講義での質疑や返答で活用します。</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：オリエンテーション			

<p>第2回：地理学の成立① 系統地理学と地誌学</p> <p>第3回：地理学の成立② 古代世界～航海と発見の世紀</p> <p>第4回：文化地理学：照葉樹林文化圏・食文化・</p> <p>第5回：観光地理学：文化遺産・コンテンツツーリズム（聖地巡礼）・旅行者行動</p> <p>第6回：歴史地理学：古地図・古文書利用・地図学・旅行記学</p> <p>第7回：景観地理学：ランドスケープ・メンタルマッピング・移民と難民</p> <p>第8回：都市地理学：空き家問題・不動産価格・商業圏</p> <p>第9回：防災地理学：防災地図・避難行動・防災教育・火山・津波</p> <p>第10回：環境保全と地理学者</p> <p>第11回：地形学／水文学から温暖化の影響を探る</p> <p>第12回：地域調査のリサーチメソッド：フィールドワークと地理巡検</p> <p>第13回：地理空間情報とGIS・地図アプリの活用</p> <p>第14回：まとめ</p> <p>定期試験：なし</p>
<p>テキスト</p> <p>特定の書籍をテキストとしては使用しませんが、毎回の講義に前もって参考図書・資料・データ・ウェブサイト・新聞・雑誌記事などを提示します</p>
<p>参考書・参考資料等</p> <p>『現代観光地理学への誘い—観光地を読み解く視座と実践』神田孝治ほか (1995) ナカニシヤ出版／2,640円</p> <p>『地図の進化論—地理空間情報と人間の未来』若林芳樹 (2015) 創元社／1,980円</p> <p>『自然地理学』松山洋 (2014) ミネルヴァ書房／3,300円</p> <p>『地理学のすすめ』J.A.Matthews & D.T.Herbert (2015) 丸善出版／2,090円</p> <p>『人間の営みがわかる地理学入門』水野一晴 (2022) KADOKAWA／1,034円</p> <p>『文化地理学—環境,景観,アイデンティティ,不平等』ウィリアム・ノートンほか (2024) 二宮書店／6,930円</p>
<p>学生に対する評価</p> <p>①授業参加25%／②アクティビティへの積極性25%／③プレゼン・課題提出50%</p> <p>※プレゼンテーションは履修者同士も評価シートで相互に評価し、建設的な意見交換の場とするようにします。</p>

授業科目名： 地誌学概論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 相馬 拓也
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・地理学（地誌を含む。）		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>地誌学（regional geography）とは、自然地理と人文地理の手法や成果を参照しつつ、地域の個性と地理的事象を明らかにする学問です。地誌学は事実の羅列によって、ある意味では「没個人的」な学問となりがちです。本講義では、地理学と隣接するさまざまな分野の知見と成果を統合することで、地誌学を個別トピック・オリエンティッドの《地理的リテラシー教育手段》として捉えなおし、地誌研究の秘める以下の応用力の高さを学習します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ❖ 固有の自然環境への人類の適応と社会形成を、マクロとミクロを織り交ぜた実例をあげながら述べることができる。 ❖ 地域を横断したグローバルな社会・文化・自然現象と研究事例を扱うことで、さまざまな専門性へと連結できる地理情報リテラシーを習得できる。 ❖ 世界各地のローカルな名所・名産品・観光資源・文化遺産・出身の有名人・地理的特色・国民性などに詳しくなることで、世界の人々と共通の話題で盛り上げられる雑学知を育める。 <p>上記の到達目標を目指し、地域固有の自然環境と人間社会の繰り広げてきたダイナミズムを学習し、相互調和の構築に向けて、学生個人が各領域での専門性を深めるための環境関連リテラシーを養います。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>本講義では、とくに《自然環境と人類のインタラクション》に焦点を当てたテーマを選定します。従来の、アジア、アフリカ、オセアニアなどの地理区分ではなく、生態環境に依拠した暮らしの文脈から、地域を横断した自然環境と人類社会のインタラクションを地理学的視点から学習します。</p> <p>毎回の講義は、自然と生態環境・地域史・国家体制などを縦糸に、そして生存戦略、資源利用、文化遺産、宗教、ジェンダー、移民・難民、紛争、食文化など、話題性の高いトピックを横軸としてゆるやかなテーマを編み上げ、個別の社会・文化・生態現象を地域横断で比較する地誌学のダイナミズムを学習します。</p> <p>毎回の講義は、約60分間をレクチャー／30分間はアクティビティ（プレゼン、ディスカッション、ワークショップ、グループワークなど）の機会を設け、授業に能動的に取り組めるアクティブ・ラーニングにより展開します。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：オリエンテーション</p>			

第2回：モンスーンの文化と社会：ヒマラヤ山脈～ネパール～ブータン～南アジア
 第3回：山岳地の暮らし：天山山脈～アルタイ山脈／アンデス山脈
 第4回：シルクロードの歴史と文化遺産：アフガニスタン～ウズベキスタン～中国新疆
 第5回：砂漠と極乾燥地：イラン～中東諸国
 第6回：世界の牧畜文化：モンゴル～キルギス／カザフスタン～中東／北アフリカ
 第7回：海とともに生きる海洋民：オーストラリア～ポリネシア～沖縄
 第8回：地中海世界の風土と歴史：スペイン～イタリア～トルコ～モロッコ
 第9回：アメリカ大陸と先住民：北米～中南米
 第10回：世界の森林と極叢林：マレーシア～パプアニューギニア～アマゾン
 第11回：国境線と飛び地の地図学：ロシア～コーカサス
 第12回：イスラームとムスリム社会：中東～イラン～パキスタン～バングラディッシュ
 第13回：移民・難民とモビリティ：東南アジア～南アジア～北アフリカ・トルコ
 第14回：まとめ
 定期試験：なし

テキスト

特定の書籍をテキストとしては使用しませんが、毎回の講義に前もって参考図書・資料・データ・ウェブサイト・新聞・雑誌記事などを提示します。

参考書・参考資料等

『歴史は景観から読み解ける：はじめての歴史地理学』上杉和央（2020）ベレ出版／1,750円
 『地理女子が教えるご当地グルメの地理学』尾形希莉子，長谷川直子（2021）ベレ出版／1,760円
 『地域研究へのアプローチ』児玉谷史朗ほか（2021）ミネルヴァ書房／3,300円
 『生活文化の地理学』小口千明，清水克志（編）（2019）古今書院／3,080円
 『図説 世界の地域問題 100』漆原 和子ほか（2022）ナカニシヤ出版／2,970円
 『みわたす・つなげる地誌学』上杉和央，小野映介（編）（2022）古今書院／2,640円
 『地球史マップ—誕生・進化・流転の全記録』クリスティアン・グラタルー（2024）
 日系ナショナル・ジオグラフィック／3,960円

学生に対する評価

①授業参加（25%）②アクティビティへの積極性（25%）③プレゼン・課題抽出（50%）
 ※プレゼンテーションは履修者同士も評価シートで相互に評価し、建設的な意見交換の場とするようにします。

授業科目名： 法学概論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 鈴木（小林）詩衣菜 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「法律学、政治学」 ・「法律学（国際法を含む。）、政治学（国際政治を含む。）」		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>人はさまざまなルールのもとで生活を送っています。一見すると人の行動を制限する印象のあるルールですが、実際には、私たちが暮らす社会を豊かにし、理想とする社会を実現するための手段でもあります。本講義では、特に、環境問題に繋がる基本的な法や法律の役割を考えます。</p> <p>本講義の到達目標は下記の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各種の法律の成り立ちと仕組みを理解し、説明することができる ・ 基本的な法的思考力を身につけ、社会問題に対し法的な観点から解決策を提示することができる 			
<p>授業の概要</p> <p>本講義では、実定法（人間の行為に基づき成立し、一定の時代の特定した国家に適用されるルールのこと）のうち、憲法、民法、行政法、刑法、国際法を取り上げます。それぞれの特徴ある条文や判例を手掛かりに、理想とする社会を実現するために、法がどのような役割をするのか、何が守られるべきなのか、どのように運用されているのかなど、環境学部の学生が知っておくべきルールを学びます。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：イントロダクション：法とはなにか、法の分類と解釈</p> <p>第2回：憲法（1）：憲法とはなにか、国民主権、立法権、行政権、司法権を考える</p> <p>第3回：憲法（2）：人権とはなにか、平等権、生存権、労働権を考える</p> <p>第4回：行政法（1）：行政法とはなにか、行政組織と行政の原理を考える</p> <p>第5回：行政法（2）：行政立法、行政行為、行政裁量を考える</p> <p>第6回：行政法（3）：行政救済法とはなにか、行政訴訟、国家賠償、損失補償を考える</p> <p>第7回：民法（1）：民法とはなにか、民法における「人」と、法律行為と意思を考える</p> <p>第8回：民法（2）：債権とはなにか、契約とはなにか</p> <p>第9回：民法（3）：不法行為とはなにか</p> <p>第10回：刑法（1）：刑法とはなにか、犯罪の成立と不成立を考える</p> <p>第11回：刑法（2）：犯罪の形態と犯罪要件はなにか</p>			

第12回：国際法（1）：国際法とはなにか、国が責任を取るとはどういうことか
第13回：国際法（2）：国際社会は直面している諸問題にどのように対応しているのか
第14回：まとめ：社会における法を考える

定期試験

テキスト

荒木尚志ほか編『ポケット六法 令和7年版'24』（有斐閣）【978-4-641-00925-7】

毎授業レジュメを配布いたします。

参考書・参考資料等

早川吉尚『法学入門』（有斐閣ストゥディア、2016年）【978-4-641-15032-4】

末川博編『法学入門 第6版補訂版』（有斐閣双書、2014年）【978-4-641-11283-4】

学生に対する評価

定期試験（80%）、毎回の授業の最後に提出する小レポート（20%）

授業科目名： 環境法入門	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 鈴木（小林） 詩衣菜 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「法律学、政治学」 ・「法律学（国際法を含む。）、政治学（国際政治を含む。）」		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>法は、人間が理想とする社会を実現するためのツールです。環境への関心の高まりとともに、時代に応じた環境に関わるルールが増えてきました。本授業では、「環境に関わる法」を初めて学ぶ学生のために、まず主要な環境問題に対して、法がどのような機能を果たしているのかを概観します。次に、具体的な環境に関わる判例や事例を通じて、さまざまな環境問題を解決するために、どのようなルールが国内外で整備されているかを学びます。併せて、各回で取り上げる環境に関わる法の繋がりを通じて、環境正義を実現するために何が守られるべきか、必要とされる対応はなにかを扱います。</p> <p>本授業の到達目標は下記の3点です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境問題が生じた背景、特徴、解決すべき問題点、残されている法的課題などの全体像を理解することができる ・環境問題と法に関係について、初歩的な理解ができる ・環境問題の解決について、法的根拠を示しながら、自分の見解を示すことができる 			
<p>授業の概要</p> <p>環境問題に向き合う上で重要な役割を果たす法制度について、その基本的な枠組を学ぶ。国内法・国際法それぞれに関する制度や理論の発展の歴史、基本原則や理念、現在の主要な法制度、それらにかかわる具体的事例等を学び、環境法としての特色や課題を理解する。2年次以降、専門性を深めていく際、あらゆる領域に関連する環境法の基礎的理解を身につけるとともに、環境法や関連領域について専門性を深めたい学生にとっては特に発展科目「国際環境法」「環境行政法」の導入的な役割を果たす。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：導入：法とはなにか、環境はいつから問題になったのか、環境正義とはなにか 第2回：環境法制史①：世界における環境問題と法、国際社会における環境の基本原則 第3回：環境法制史②：日本における環境問題と法、日本における環境の基本原則 第4回：大気と法：地球温暖化とはなにか、大気汚染とはなにか、気候正義を考える 第5回：水と法：水環境（海、河川、湿地）をめぐる諸問題はなにか、水の安全保障を考える</p>			

<p>第6回：エネルギーと法：再生可能エネルギーとはなにか、エネルギー正義を考える</p> <p>第7回：森林と法：REDD+とはなにか、森林保全と気候変動の適応・緩和を考える</p> <p>第8回：生き物と法：生物多様性、ネイチャーポジティブとはなにか、動植物の保護と輸出入を考える</p> <p>第9回：自然災害と法：レジリエンスとはなにか、生態系を活用した減災と災害正義を考える</p> <p>第10回：景観と法：景観とはなにか、持続可能なまちづくりを考える</p> <p>第11回：廃棄物と法：廃棄物(ごみ)とはなにか、廃棄物と有害物質の処理と輸出入を考える</p> <p>第12回：環境正義と法①：清潔で健康的かつ持続可能な環境への権利と先住民族と土地権利を考える</p> <p>第13回：環境正義と法②：裁判と救済。環境紛争の解決を考える</p> <p>第14回：まとめ：環境と法の多様な繋がりを再考する</p> <p>定期試験</p>
<p>テキスト</p> <p>毎授業レジュメを配布いたします。</p>
<p>参考書・参考資料等</p> <p>北村喜宣『環境法[第3版]』（有斐閣ストゥディア、2024年）【978-4-641-15124-6】</p> <p>西村智朗ほか『ハイブリッド環境法』（嵯峨野書院、2022年）【978-4-7823-0608-6】</p>
<p>学生に対する評価</p> <p>定期試験（80%）、毎回の授業の最後に提出する小レポート（20%）</p>

授業科目名： 環境政策・経済学入門	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 遠藤 崇浩、西林 勝吾 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「法律学、政治学」 ・「法律学（国際法を含む。）、政治学（国際政治を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 環境問題を、政策と経済の観点から分析し理解するための基礎を学ぶ。環境政策の枠組と内容を理解し、政策の立案・決定・実施過程を検討する。また、環境問題を経済学的に分析する手法・枠組を学ぶ。そのうえで、環境政策・経済学の意義と課題について議論を深める。2年次以降、専門性を深めていく際、あらゆる領域で重要となる環境政策・経済の基礎的理解を身につけるとともに、環境政策学や環境経済学の領域で専門性を深めたい学生にとっては特に発展科目「環境ガバナンス」「環境経済学」「環境と国際政治」「環境と国際経済」等の導入的な役割を果たす。 (オムニバス方式／全14回) (遠藤崇浩／7回) 環境政策学 (西林勝吾／7回) 環境経済学			
授業の概要 講義前半部分で主に環境経済学の知見を基に、環境問題の原因である市場の失敗とその是正策に関する理論を学ぶ。講義後半部分で昨今の環境問題に焦点をあて、前半で培った理論的視座が現実の環境問題の理解にどのように役立つか解説する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：授業ガイダンス（担当：遠藤崇浩・西林勝吾） 第2回：経済学的分析の手法（担当：西林勝吾） 第3回：市場の失敗と外部性（担当：西林勝吾） 第4回：共有資源の利用と管理（担当：西林勝吾） 第5回：環境政策の基礎理論①：直接規制、環境税（担当：西林勝吾） 第6回：環境政策の基礎理論②：直接交渉、排出権取引（担当：西林勝吾） 第7回：環境の価値（担当：西林勝吾） 第8回：環境問題の性質（担当：遠藤崇浩） 第9回：日本の公害（担当：遠藤崇浩）			

第10回：公害問題（1）（地盤沈下）（担当：遠藤崇浩） 第11回：公害問題（2）（土壌汚染）（担当：遠藤崇浩） 第12回：地球環境問題とSDGs（担当：遠藤崇浩） 第13回：環境と防災（担当：遠藤崇浩） 第14回：持続可能な社会への移行（担当：遠藤崇浩） 定期試験
テキスト 特に指定しない。
参考書・参考資料等 ・『環境経済学をつかむ 第5版』（栗山浩一・馬奈木俊介著、有斐閣） ・『地域から考える環境と経済』（八木信一・関耕平著、有斐閣） ・その他、授業中に適宜資料を配付する。
学生に対する評価 定期試験（80%）、毎回の授業の最後に提出する小レポート（20%）

授業科目名： 国際環境法	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 鈴木（小林） 詩衣菜 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「法律学、政治学」 ・「法律学（国際法を含む。）、政治学（国際政治を含む。）」		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>環境に関わる法は、一見わたくし達の日常に関係ないようにみえますが、地球温暖化、大気汚染、水質汚濁、廃棄物問題など、実は様々な場面で関係しています。国内環境法では、各国の事情に応じて必要な環境保全に関わるルールが整備され、国際環境法では、環境問題に対応した環境条約が作られてきました。本講義では、各環境問題に対応する環境諸条約を取り上げ、環境問題を解決するためのルールの基本的な構造を概観したうえで、国家が直面している環境問題にどのように対応し、解決してきたのかを検討します。</p> <p>なお、環境は非常に広範囲にわたりますので、受講生のみなさんの興味や関心に応じて、取り上げるテーマの内容や順序を変更する場合があります。</p> <p>本授業の到達目標は下記の3点です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際的な環境問題について法的な観点から、考察できる ・各環境条約の全体像を把握し、その背景、特徴、解決すべき問題点、残されている課題を理解し、説明することができる ・国際的な環境問題に対し、法的根拠に基づいて自分の見解を提示することができる 			
<p>授業の概要</p> <p>国際環境法は、国際環境問題の特質ゆえに、形成、発展、形態、内容、履行確保において様々な特徴がある。本講義では、環境条約を手掛かりに、その基本的な構造を取り上げ、環境問題に対し国家がどのように対応してきているのかを検討する。また、具体的な判例を通じて、環境問題を解決するために、何が守られるべきか、必要とされる対応はなにか、などについて沢山考える。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：イントロダクション：国際法とはなにか、国際環境法とはなにか</p> <p>第2回：国際環境法制史（1）：国際環境法の基本原則</p> <p>第3回：国際環境法制史（2）：国際環境法の規範の発展</p> <p>第4回：大気に関わる国際法制度（1）：オゾン層保護条約から大気汚染を考える</p> <p>第5回：大気に関わる国際法制度（2）：気候変動枠組条約とパリ協定から地球温暖化を考える</p> <p>第6回：森林に関わる国際法制度：REDD+から気候変動の緩和と適応を考える</p>			

第7回：砂漠に関わる国際法制度：砂漠化対処条約から砂漠化問題を考える

第8回：生き物に関わる国際法制度（1）：生物多様性条約から生物多様性を考える

第9回：生き物に関わる国際法制度（2）：ワシントン条約から動物の輸出入を考える

第10回：水に関わる国際法制度（1）：国連海洋法条約から海洋環境を考える

第11回：水に関わる国際法制度（2）：ラムサール条約から湿地保全を考える

第12回：世界遺産に関わる国際法制度：世界遺産条約と水中文化遺産保護条約を考える

第13回：廃棄物に関わる国際法制度：バーゼル条約からごみ問題を考える

第14回：宇宙に関わる国際法制度：宇宙条約から宇宙環境を考える

定期試験

テキスト

植木俊哉ほか編『国際条約集』（有斐閣、2024年）【978-4-641-00161-9】

毎授業レジュメを配布いたします。

参考書・参考資料等

繁田泰宏ほか編『ケースブック国際環境法』（東信堂、2020年）【978-4-798-91657-6】

Alan Boyle and Catherine Redgwell, “International Law and the Environment fourth edition”, Oxford 2021 【978-0-199-59401-6】

学生に対する評価

定期試験（80%）、毎回の授業の最後に提出する小レポート（20%）

授業科目名： 環境行政法	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 滝口 直樹
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「法律学、政治学」 ・「法律学（国際法を含む。）、政治学（国際政治を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 環境分野における法律、特に規制等の行政法の内容、制定経緯、運用について学ぶ。環境保全や持続可能な社会経済づくりにおける法制度の果たす役割と問題点について理解し、よりよい制度作りを構想、立案、実施できる能力を身につけることを目指す。			
授業の概要 環境行政法とは、環境問題が顕在化するにしたがって発展してきた環境行政に関わる法制度である。本講義では、その基本的な考え方と構造を学び、現代社会における可能性と課題を考える。具体的な環境問題に対する法令文、裁判例等を扱いながら、問題解決に向けた行政法制度の意義と問題点を議論する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：環境問題と政府、法律の果たす役割 第2回：深刻な公害問題と行政法の対応 第3回：自然破壊問題と行政法の役割 第4回：権利的アプローチと環境権 第5回：大気汚染、水質汚濁と行政法 第6回：土壌汚染と行政法の対応 第7回：廃棄物、リサイクル問題と行政法 第8回：気候変動問題と法制度の果たす役割 第9回：生物多様性、いきものと行政法 第10回：化学物質管理と行政規制 第11回：原子力安全と行政法の役割 第12回：環境影響評価制度の役割と参加 第13回：行政の透明性と環境問題 第14回：環境行政法の今後の役割 定期試験 なし			
テキスト プリントを配布する			

参考書・参考資料等

環境法BASIC 大塚直著 有斐閣

学生に対する評価

毎回の振り返りレポート 5%×14回 (70%)、期末レポート (30%)

授業科目名： 環境ガバナンス	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 遠藤 崇浩
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目 (中学校社会及び高等学校公民)		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「法律学、政治学」 ・「法律学（国際法を含む。）、政治学（国際政治を含む。）」		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>この授業では、環境問題の解決に向けた様々な社会的アクター（市場、政府、共同体、企業など）の役割および連携について基本的な考え方を学ぶ。具体的には資源配分における市場の役割、市場の失敗、政府介入の効果、共有資源問題、日本の公害行政、持続可能な開発目標に関する基本的知識を習得することを目指す。</p> <p>本授業の到達目標は以下の能力を身につけることである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現代社会における人間活動と環境問題の相互作用の特徴について説明できること。 2. 過去の環境政策の歴史を踏まえたうえで、昨今の環境問題について説明できること。 3. 環境問題の解決に向けた複数の政策手段について、その長所と短所を説明できること。 			
<p>授業の概要</p> <p>環境ガバナンスとは、社会が環境との関係を調整、管理するための能力や仕組みのことをいう。現代社会において、環境ガバナンスのあり方は多様性を増し、関与する主体も広がっている。本講義では、そのような現代的視野を踏まえ、環境課題の解決と持続可能な社会づくりに向けて、行政のみならず、企業、NPOなどの市民組織、さらに多様な市民が積極的に関わり合いともに取り組む仕組みについて、検討を深める。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：授業ガイダンス</p> <p>第2回：共有資源問題</p> <p>第3回：持続可能な発展</p> <p>第4回：公害の歴史</p> <p>第5回：日本の公害行政</p> <p>第6回：公害から地球環境問題へ</p> <p>第7回：アカデミックライティング</p> <p>第8回：外部性</p> <p>第9回：環境政策の構造</p> <p>第10回：環境政策の手段（直接規制と経済手法）</p> <p>第11回：環境政策の手段（情報手法と自主的取り組み）</p>			

第12回：環境ガバナンスにおける市民、NGOの役割
第13回：環境ガバナンスにおける企業の役割
第14回：環境ガバナンスにおける政府の役割
テキスト 特に指定しない
参考書・参考資料等 ・『地域から考える環境と経済』（八木信一・関耕平著、有斐閣）
学生に対する評価 期末試験（80％）毎回の授業の最後に提出する小レポート（20％）

授業科目名： 市民参加と合意形成	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 柴田 裕希 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「法律学、政治学」 ・「法律学（国際法を含む。）、政治学（国際政治を含む。）」		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>（授業のテーマ）</p> <p>持続可能な地域づくりに向けた、公的な計画活動と開発事業における市民参加の手法と合意形成のあり方を事例を交えて学ぶ。</p> <p>（到達目標）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公的な意思決定における市民参加ならびに合意形成の目的と役割を説明することができる。 ・市民参加と合意形成の手法について過去の具体例を挙げて説明することができる。 ・政策課題に対し適切な市民参加と合意形成の手法について構想し説明することができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>現実社会のなかで環境問題を解決し、持続可能な社会をつくろうとする過程には、様々な人々や組織の価値観、立場、利害関係などを調整し、合意形成を図る必要がある。本講義では、主として行政が行う計画づくりや公共事業に着目し、持続可能な地域形成に向けた、公的な計画活動における市民参加の手法と合意形成のあり方を検討する。地域とその環境の情報を整理し、これに基づいて参加型で計画を立案し、社会的な合意を実現するための手法について、事例と理論の両面から学びその知識と技術を修得する。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：公的な計画における意思決定の仕組みとアカウンタビリティについて</p> <p>第2回：公共計画の環境・社会配慮と計画サイクルについて</p> <p>第3回：公共空間での議論について</p> <p>第4回：市民参加の類型化と段階について</p> <p>第5回：パブリック・インボルブメント（PI）の取り組みについて</p> <p>第6回：市民参加と訴訟との連動について</p> <p>第7回：文書ベースの参加手法について</p> <p>第8回：会議ベースの参加手法について</p> <p>第9回：ワークショップ形式、熟議型の参加手法について</p> <p>第10回：市民参加におけるICTの活用について</p> <p>第11回：アウトリーチによる情報交流について</p>			

第12回：大型施設開発事業における合意形成の事例について

第13回：再生可能エネルギー開発における合意形成の事例について

第14回：まちづくり方針に関する合意形成の事例について

定期試験なし

テキスト

市民参加と合意形成—都市と環境の計画づくり（原科幸彦 編、学芸出版）

参考書・参考資料等

授業中に適宜資料を配布する。

学生に対する評価

最終テスト（30%）、授業内の（複数回の）レポート（70%）

授業科目名： 気候・エネルギー政策論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 平田 仁子 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「法律学、政治学」 ・「法律学（国際法を含む。）、政治学（国際政治を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 気候変動に関する政策課題を政治的側面から捉え、多面的な知識と考察力を育む			
授業の概要 気候変動が喫緊の課題として我々の社会の行く末を阻む今、その緩和と適応を早急に促すための政策転換が強く求められている。しかし現状は、国際社会の対応は不十分なまま事態は悪化している。この授業は、対策が進まない原因について切り込み、気候変動を政治の課題としてとらえ、国際社会や各国の気候・エネルギー政策動向を理解し、課題と解決の可能性について考察し検討することを目的とする。国連による気候レジームとしての「パリ協定」のもと、日本をはじめとする各国がどのような姿勢を取り、政策を進めてきたか、またそうした中で市民社会がどのような役割を果たしてきたかを多面的に学び、これからの人類の存続をかけた挑戦に向け、自由闊達かつ創造的に今後の展望を議論する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：イントロダクション：気候変動とはどのような問題なのか 第2回：取り残される背景：無関心と正義について 第3回：国際政治における動向：国連気候変動枠組条約交渉の歴史 第4回：気候科学について：気候変動に関する政府間パネル 第5回：被害の現場はどこか：地域間・世代間の公平性をめぐる闘争 第6回：日本の気候・エネルギー政策の経緯と特徴 第7回：エネルギーについて：化石燃料・再生可能エネルギー・原子力 第8回：解決策を探る：トップダウンかボトムアップか 第9回：解決策を探る：技術革新か社会変革か 第10回：市民社会・企業の役割 第11回：政治の役割：気候政策統合の探究 第12回：グループワーク「課題設定と対策メニューの選定」 第13回：グループワーク「解決策と戦略の策定」 第14回：発表・講評 定期試験			

テキスト：平田仁子『気候変動と政治』成文堂

参考書・参考資料等

クライメート・リアリティ・ジャパン編『気候変動を学ぼう』合同出版

セス・ゴードン他『気候変動パーフェクトガイド』日経ナショナルジオグラフィックス

ユージーン・バーダック他『政策立案の技法』東洋経済出版社

学生に対する評価

定期試験（50%）、グループワークへの積極的な参画（30%）、授業参加度（20%）

授業科目名： 経済学概論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 西林 勝吾
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 マイクロ経済学の基本的な考え方を理解すること、そのマイクロ経済学の基本的な考え方を使得、経済の具体的な問題にアプローチし、分析できるようになることを目標とする。			
授業の概要 マイクロ経済学の入門的な内容を扱う。マイクロ経済学とは、個々の消費者や生産者がどのような経済的な意思決定を行っているのか、その結果として市場において商品の価格や取引量がどのように決まっているのかなどを分析する学問である。 この授業では、市場における需要と供給の作用がどのように商品の価格や取引数量を決定しているのか、その時に消費者や生産者の厚生がどうなるのか、また政府の様々な規制や税などは経済にどのような影響を与えているのか、などの問題を考える。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンス 第2回：市場における需要と供給の作用 第3回：弾力性とその応用 第4回：需要、供給、および政府の政策 第5回：消費者、生産者と市場の効率性 第6回：余剰分析の応用①：課税の費用 第7回：余剰分析の応用②：国際貿易 第8回：外部性 第9回：公共財と共有資源 第10回：税制の設計 第11回：競走市場における企業 第12回：独占、寡占 第13回：独占的競争 第14回：まとめ 定期試験 テキスト			

・『マンキュー経済学Ⅰ ミクロ編（第4版）』（N.G. マンキュー、東洋経済新報社、2019年）

参考書・参考資料等

- ・『ミクロ経済学の力』（神取道宏、日本評論社、2014年）
- ・その他、授業中に適宜資料を配付する。

学生に対する評価

定期試験（80％）、授業内小レポート（20％）

授業科目名： 環境教育・ESDとシ ィズンシップ	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 二ノ宮リム さち 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 持続可能な社会づくりを担う一人の市民としての自らのシティズンシップと、そうしたシ ィズンシップの発揮を支える環境教育・ESDについて学び議論するなかで、持続可能な社会づ くりとそれを支える人々のちからについて自分なりの考えを表現できるようになる。			
授業の概要 持続可能な開発とはなにか、その実現に向けて人間や社会にはどのような変容・変革が求め られるか、人々が持続可能な社会づくりに参画していく力としてのシティズンシップとは何か 、学び考えることを目的とする。 わたしたちの地域と世界が直面する「環境問題」を「わたし」と「多様な人々」の目線から 確認し、持続可能な開発とそれを支えるシティズンシップと、それを培う教育・学習のあり方 を検討する。持続可能な社会づくりとそれを担う人間についての基本的な視点と、行動するた めの基盤となるシティズンシップを、自らが身に着けることも目指す。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンス・授業の目的と概要 第2回：地域の環境問題～“わたし”の目線から・“多様な人々”の目線から 第3回：世界の環境問題とわたしたち 第4回：持続可能な未来へ向けた人間・社会の変容・変革 第5回：持続可能な社会づくりを支えるシティズンシップ 第6回：シティズンシップと環境教育・持続可能な開発のための教育（ESD） 第7回：人間・社会の変容・変革の実像～学校の現場から 第8回：人間・社会の変容・変革の実像～地域の現場から 第9回：持続可能な社会をつくる“わたし”のシティズンシップ 第10回：持続可能な社会をつくる“方法”～シティズンシップの視点から 第11回：持続可能な社会づくりへ向けた課題～グループワーク 第12回：持続可能な社会づくりへ向けてわたしたちにできること～グループワーク 第13回：グループ発表 第14回：ふりかえり～環境教育・ESDとわたしたちのシティズンシップ			

定期試験は実施しない。
テキスト なし
参考書・参考資料等 二ノ宮リムさち・高梨宏子（編著）（2024）「地域から学ぶ・世界を創る：パブリック・アチーブメントと持続可能な未来」学文社. 池谷美衣子・田島祥・二ノ宮リムさち（編著）（2024）「人生を拓く・社会を創る：シティズンシップの学び」学文社. その他適宜授業内で提示する。
学生に対する評価 各回授業後のリアクションペーパー40%、グループ発表30%、最終レポート30%

授業科目名： 環境学のための社会 調査法入門	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 森（石川） 朋子 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 社会調査を実施するうえで必要な基本的知識を身に付けるとともに、社会調査の設計方法、質的・量的調査の特徴と実施手法を理解する。			
授業の概要 環境学におけるアプローチのひとつとしての社会調査について、その意義、背景、方法、思想に関する基本的な知識を学ぶ。さまざまな社会調査の手法と、それらにもとづくデータ収集・分析の具体的方法について、量的調査・質的調査の双方を扱いながら、実例に沿って解説する。また、社会調査の歴史や思想、倫理について、環境学におけるパラダイム理解のあり方も踏まえ、検討する。卒業論文に向けて社会調査を行う学生にとっては、そのための基礎的なスキルを習得する機会となり、それ以外の学生にとっても、社会調査を読み解くためのリテラシーを獲得する機会となる。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：授業のガイダンスと社会調査の歴史 第2回：何のための社会調査か？～社会調査の意義と倫理を理解する～ 第3回：量的調査の基礎講義 第4回：量的調査におけるサンプリングとワーディング 第5回：量的調査の事例を学ぶ 第6回：量的調査の演習 第7回：質的調査の基礎講義 第8回：質的調査の分析方法 第9回：質的調査の事例を学ぶ 第10回：質的調査の演習 第11回：良い問いをたてるには？～リサーチクエスションの条件～ 第12回：良い仮説をたてるには？ 第13回：環境問題に関する社会調査を設計する（グループでの演習） 第14回：環境問題に関する社会調査を設計する（グループ発表）			
テキスト			

授業の教材は教員が作成し、事前にオンラインで共有する。
参考書・参考資料等 盛山和夫「社会調査法入門」有斐閣ブックス
学生に対する評価 毎回の授業で実施するワーク（40%）、第6回と第10回の演習で実施する小テスト(20%) × 2回（40%）、グループ発表（20%）

授業科目名： 環境経済学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 西林 勝吾
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 本講義では、環境経済学の形成過程、発展史についての理解を深め、現代の環境経済学を相対化する視点を身につけることを目標とする。そして、各時代の環境経済学的議論は、同時代の環境問題、環境政策の歴史と密接な関係があることを学ぶ。			
授業の概要 環境経済学は、環境問題とは何か、そしてそのための処方箋はどのようなものかを、経済学的に分析し、考察する学問である。現在、環境問題が人間社会の抱える最も大きな問題の一つであることは明らかであり、大半の環境問題は人間の経済活動に起因することから、環境問題のメカニズムに経済学的にアプローチすることは不可欠である。本講義では、環境問題が経済学に問いかけているもの、経済学が展望する持続可能な経済システムについて学び、議論する。また、環境経済学の発展史に触れ、現代の環境経済学を相対化する視点を身に付けることも目標とする。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：授業ガイダンス 第2回：環境経済学入門の復習：市場の失敗と外部性 第3回：古典派経済学における環境：A.スミス、D.リカード、T.R.マルサス 第4回：環境経済学の源流：J.S.ミル 第5回：資本主義と環境問題：K.マルクス 第6回：「負の財」と環境資源：W.S.ジェヴォンズ 第7回：外部性の発見：A.マーシャルとA.C.ピグー 第8回：制度派経済学と環境問題：K.W.カップ 第9回：新制度派経済学と環境問題：R.H.コース 第10回：環境経済学の幕開け：A.V.クネーゼとJ.H.デイルズ 第11回：もう一つの環境経済学：K.E.ボールディング、H.デイリー、N.ジョージ・ジェスク＝レーゲン、E.F.シューマッハー 第12回：日本の環境経済学①：宇沢弘文 第13回：日本の環境経済学②：都留重人、宮本憲一			

第14回：まとめ

定期試験なし

テキスト

特に指定しない。

参考書・参考資料等

授業中に適宜資料を配付する。

学生に対する評価

期末レポート試験（80%）、授業内小レポート（20%）

授業科目名： サステナビリティ経営論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 河口 眞理子 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 環境やサステナビリティ課題に取り組む企業の最新動向や先進事例に関する知識を習得するとともに、企業の社会的責任をビジネスに生かす経営戦略を作成するスキルを身に付ける。			
授業の概要 現代社会において、環境や人権といったサステナビリティに関わる課題への取組は、企業を含むあらゆる組織にとって経営戦略の最重要課題である。本講義では、経営戦略としてのサステナビリティへの取組、すなわちサステナビリティ経営について、基本的な理念と現状を学ぶ。具体的な事例を取り上げながら、ESG投資やSDGsとの関わりを含め、国内外の動向を理解し、企業と社会の相互関係にもとづく今後の課題と可能性を議論する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：授業のガイダンス、企業を取り巻く環境の変化 第2回：CSR、CSV、ESGを知る 第3回：食から見るビジネス課題（講義） 第4回：食から見るビジネス課題（グループ討論） 第5回：企業目線で見たSDGs（目標1～8を扱う） 第6回：企業目線で見たSDGs（目標9～17を扱う） 第7回：企業を取り巻くステークホルダー 第8回：企業の取組事例を調べる 第9回：調べた企業の取組事例を発表する、意見交換する 第10回：サステナビリティ経営戦略の基本とプロセス 第11回：サステナビリティ経営戦略の作成手法 第12回：サステナビリティ経営戦略を練る（例題演習） 第13回：サステナビリティ経営戦略を練る（グループ討論） 第14回：サステナビリティ経営戦略を練る（グループ発表） 定期試験：なし。			
テキスト 授業の教材は教員が作成し、事前にオンラインで共有する。			

参考書・参考資料等

ピーターD・ピーダーゼン、竹林征雄「SDGs ビジネス戦略」日刊工業新聞社

モニターデロイト「SDGsが問いかける経営の未来」日本経済新聞出版

学生に対する評価

出席および授業参加度（30%）、小テスト（20%）×2回（40%）、3. グループ発表（30%）

授業科目名： 環境社会学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 富田 涼都 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 環境と社会の相互関係という観点から各種の「環境問題」の事例を検討し、その解決に対して何が必要なのかについて現場に則して考えられるようになる。			
授業の概要 環境社会学は、「環境と人間社会の関係」と「環境を前にした人間社会内の関係」を、大きなネットワークとして捉えて、制度や経済、文化などを考慮しながら社会のあり方について探究する学問領域である。本授業では、様々な環境問題を取り上げながら、具体的事例を環境社会学のアプローチを用いて解説することで、環境社会学の基本的な理論的枠組みを理解し、それらを用いて事例を分析することができるようになることを目指す。また、そうした理解に立ちながら、自らや現在の社会を批判的に捉え返し、未来を構想することも見据える。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンス 第2回：エコロジカル・フットプリントから見える「環境負荷」 第3回：自然の「恵み」を支える社会のシステム 第4回：自然の「恵み」を受け続けるためには？ 第5回：生態系サービスをめぐる環境と社会の相互作用 第6回：リスクの分配は公正か？ 第7回：環境問題の「解決」とは？ 第8回：コモンズの悲劇と環境問題 第9回：コモンズの悲劇を超えて 第10回：野生動物と人間社会の軋轢 第11回：野生動物の「被害」を掘り下げる 第12回：公共政策としての環境保全という発想 第13回：再帰的な市民参加型調査の意味 第14回：講義のまとめ 定期試験 テキスト			

なし。適宜資料を提示する。

参考書・参考資料等

関礼子ほか, 2009, 『環境の社会学』 有斐閣.

西城戸誠・船戸修一 編, 2012, 『環境と社会』 2012, 人文書院.

宮内泰介編, 2013, 『なぜ環境保全部うまくいかないのか』 新泉社.

富田涼都, 2014, 『自然再生の環境倫理』 昭和堂.

宮内泰介編, 2017, 『どうしたら環境保全部うまくいくのか』 新泉社.

『シリーズ 環境社会学講座』 (全6巻) 新泉社.

その他、適宜提示する。

学生に対する評価

講義中に課す小課題 (20%) と期末試験 (80%)

授業科目名： 持続可能な開発と国際協力	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 相馬 拓也 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>本講義は、20世紀から続く課題でもある《持続可能な開発》と《国際協力のあり方》について、開発学・地理学を軸としながら人類・保全生態学・国際関係学・環境学などの最新の成果を参照しつつ、地球社会の課題を自らの問題としてとらえる次の知的土壌を養います。とくにSDGsの理念を理解し、国際社会の実践について次の学びを深めます。</p> <p>◎人類社会の抱える国際問題と環境課題の現状を知り、自身の役割とコミットメントに気づきを得ることができる。</p> <p>◎国際社会の抱える喫緊の課題（マイクロプラスチックと海洋汚染、食糧問題、家畜とCo2排出、捕鯨、砂漠化、自然災害、温暖化など）を自らの言葉で説明し、その対処や対策方法を考えることができる。</p> <p>◎ニュースや新聞などの日常で聞かれる環境問題、災害、紛争、移民・難民などの国際社会の動向について、事例を交えて論理的かつ批評的に語るができるようになる。</p> <p>講義を通じて地球社会の課題に向けて、自分なりの解決策やコミットメントへの発見・気づきを得ることを本講義の到達目標とします。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>講義では、開発途上国における環境問題や持続可能な開発の実現に着目し、そのためにどのような国際協力が行われ、どのような効果と課題がみられるかをグローバルな事例から検討します。日本をはじめとする先進諸国や、国連・世界銀行・アジア開発銀行といった国際機関による開発援助、さらに南南協力・三角協力のスキームの役割と、それらを通じた貧困・紛争・環境問題・感染症などへの対処や対策を取り上げます。加えて、NPO/NGOなどの市民活動や草の根の国際協力についても学習し、ミクロからマクロレベルまで幅広い個別事例を扱いながら学びを深めます。本講義の重要な理念でもある市民参加型開発・人間開発・アクション＝リサーチを軸として、学生自らが国際協力に参加できる理論と実践の手法を学習します。</p> <p>本講義はアクティブ・ラーニング形式の講義を採用し、冒頭で講義担当者から問いかけや質問票を配布し、参加学生はこれに必ず答えるようにします。学生には適宜、記入内容の発言や発表を予告なしで求めます。また毎回の講義の最後には、履修学生はリアクションペーパーを提出頂きます。疑問や問題点・気づき・発見などを記入いただき、次回の講義での質疑や返答で活用します。</p>			

授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）

第1回：オリエンテーション～持続可能な開発とはなにか？～

第2回：持続可能な開発のための2030アジェンダと Sustainable Development Goals (SDGs)

第3回：世界を取り巻く環境問題の現実と窮状を知る

第4回：環境対策のグローバリゼーションと国際機関の役割

第5回：政府開発援助(ODA)の仕組みと歴史

第6回：国際協力機構(JICA)の役割と近年の活動

第7回：自然災害と国際防災協力のイニシアティブ

第8回：社会起業と市民参加型開発・NGOの役割

第9回：草の根コミュニティ開発と農学国際協力

第10回：開発にとっての人類学者とは何者か？

第11回：開発途上国の教育問題

第12回：世界のジェンダー問題と女子教育エンパワメント

第13回：移民と難民の世紀の多文化共生を考える

第14回：まとめ～持続可能な開発の先に何をみいだすのか？～

定期試験なし：課題提出＋グループ・プレゼンテーション

テキスト

特定の書籍をテキストとしては使用しませんが、毎回の講義に前もって参考図書・資料・データ・ウェブサイト・新聞雑誌記事などを提示します。

参考書・参考資料等

『ヒマラヤに架ける夢』川喜田二郎(1995) 文真堂 /2,350円

『慈悲魔—カンボジア支援活動で見てきたこと』栗本英世(2008) リーブル /933円

『国際開発学入門』大坪滋, 木村宏恒, 伊東早苗(2009) 勁草書房 /3,630円

『日本の国際教育協力: 歴史と展望』萱島信子, 黒田一雄(2017) 東大出版会 /6,380円

『国際協力を学ぶ人のために』内海成治, 桑名恵, 杉田映理(2024) 世界思想社 /2,420円

『ODAの国際政治経済学—戦後日本外交と対外援助1952-2022』保城広至(2024) 千倉書房 /5,940円

学生に対する評価

①授業参加25% / ②アクティビティへの積極性25% / ③プレゼン・課題提出50%

※プレゼンテーションは履修者同士も評価シートで相互に評価し、建設的な意見交換の場とするようにします。

授業科目名： 社会変革の環境教育 学・ESD論	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 二ノ宮リム さち 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 持続可能な未来へ向けて不可欠とされる社会の変革と、それを支える環境教育・ESD（持続可能な開発のための教育）としての人々の変容について、国内外の議論と実践、それらを通じて共有されてきた理念を学び、自らの実践や研究につなげることを目指す。			
授業の概要 持続可能な未来の実現に向けた社会経済システム全体の変革が求められるいま、それを支える人々の変容のあり方が問われている。この授業では、国際社会ならびに国内での議論と実践を踏まえつつ、自らの体験を通じて、社会の変革と人々の変容、それを支える環境教育・持続可能な開発のための教育（ESD）について検討する。関連領域の理論を理解するとともに、自然環境保全や公害といった環境課題に向き合う活動の具体的事例から学び、社会の変革と人々の変容の関係について研究・実践双方の視点から考えることを目指す。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンス・授業の目的と概要 第2回：持続可能な開発の理念 第3回：持続可能な未来へ向けた社会の変革 第4回：社会変革を支える人々の変容 第5回：環境教育・持続可能な開発のための教育（ESD）の発展経緯 第6回：環境教育・ESDの理論 第7回：自然環境保全に取り組む人々 第8回：公害問題に向き合う人々 第9回：持続可能な地域づくりに参画する人々 第10回：消費からみた社会・人々の変革・変容 第11回：人権からみた社会・人々の変革・変容 第12回：まちづくりからみた社会・人々の変革・変容 第13回：持続可能な社会づくりと“対話” 第14回：まとめ～社会変革と環境教育・ESD 定期試験：なし			

テキスト

なし

参考書・参考資料等

阿部治・野田恵（編著）日本環境教育学会（監修）（2019）「知る・わかる・伝えるSDGs I 貧困・食料・健康・ジェンダー・水と衛生」学文社.

阿部治・二ノ宮リムさち（編著）（2021）「知る・わかる・伝えるSDGs II エネルギー・しごと・産業と技術・平等・まちづくり」学文社.

阿部治・岩本泰（編著）（2022）「知る・わかる・伝えるSDGs III生産と消費・気候変動・海の豊かさ・陸の豊かさ・平和と公正」学文社.

阿部治・朝岡幸彦（編著）（2022）「知る・わかる・伝えるSDGs IV教育・パートナーシップ・ポストコロナ」学文社.

荻原彰・小玉敏也（2022）「SDGs時代の教育:社会変革のためのESD」筑波書房.

その他適宜授業内で提示する。

学生に対する評価

各回授業後のリアクションペーパー40%、グループ発表30%、最終レポート30%

授業科目名： 参画と対話のファシリテーション	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 柴田 裕希 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「法律学、政治学」 ・「法律学（国際法を含む。）、政治学（国際政治を含む。）」		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>（授業のテーマ）</p> <p>他者との対話において互いの立場や価値観の違いを理解し、利害を調整しながら合意に向かうための、相互理解と合意形成を支援するファシリテーションの技術を学ぶ。</p> <p>（到達目標）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 合意形成を目的とした会議の場を設計し、議論のルールを設定することができる。 ● 参加型民主主義の会議プログラムを作成し、会議を運営することができる。 ● 参加者の相互理解や合意を促すためのファシリテーション技法を用いることができる。 			
<p>授業の概要</p> <p>持続可能な社会の実現に向けては、多様な政治主体が公共的な課題に対し、対話と協働を通じて意思決定や行動を生み出すことが不可欠である。その際、対話を促し、多様な立場の意見をつなぎ合わせ、合意形成や協働のプロセスを支えるファシリテーターが重要な役割を果たす。本授業では、ファシリテーションの理念と技術を理論と実践の双方から学ぶとともに、政治学の視点から「民主主義における対話」「市民参画の仕組み」「公共的意思決定の過程」におけるファシリテーションの応用を学ぶ。さらに、参加型の話し合いを実際に体験し、環境アクションに限らず、社会課題全般に取り組むための思考力とスキルを養うことを目指す。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：熟議型・討議型民主主義とファシリテーションの役割について</p> <p>第2回：公共性の概念（変動性、時限性、不確実性、相対性、多元性）と会議形式による意思決定</p> <p>第3回：会議の場の設計：時間、空間、司会と事務局、参加者、政治的代表性問題について</p> <p>第4回：会議のルール：コミュニケーション行為の理性、議論の規範について</p> <p>第5回：会議の進行管理：モデレーターの役割、進行方法の自己組織形成について</p> <p>第6回：会議から合意形成へ：分配的公正と手続的公正</p> <p>第7回：会議と政治的意思決定：創造的解決策の十分な模索</p> <p>第8回：ファシリテーション（カードによる発想法）：グラフィックファシリテーション</p> <p>第9回：ファシリテーション（PCMによる課題分析）：課題混在状況における重要課題の特定</p> <p>第10回：ファシリテーション（SWOT分析）：複数案の絞り込みと優位案の特定</p>			

第11回：防災ゲーム：クロスロード状況における二者択一判断
第12回：ワークショップ企画の設計：テーマ決定と企画案の構想
第13回：ワークショップ企画の発表：企画発表
第14回：まとめ
テキスト
講義ごとに配布
参考書・参考資料等
ファシリテーションの教科書（吉田素文 著、東洋経済新報社）
学生に対する評価
最終テスト（30%）、授業内の（複数回の）成果物（70%）

授業科目名： 環境社会調査法実践	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 森（石川） 朋子 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
授業のテーマ及び到達目標 環境問題に関わる社会調査を具体的に企画・実施することができる知識とスキルを身に付ける。また調査結果を適切かつ分かりやすく取りまとめるスキルを習得する。			
授業の概要 「環境学のための社会調査法入門」で学んだ手法と、歴史や倫理等に関する理解にもとづき、環境学領域における具体的な調査の企画、実施、データ分析、報告書作成を経験しながら、実践的スキルを身につけるための科目である。環境学研究に関するパラダイム理解も踏まえながら、現代の環境課題にもとづく問いを設定したうえで、必要な社会調査の内容を検討し、適切なデータ収集・分析方法を確定、実施して、得られた結果を報告書にまとめる。卒業論文、さらに卒業後も見据え、環境課題の理解と解決につながる社会調査を行うための理解と技能を確立することを目指す。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：授業のガイダンスと社会調査の基礎的事項の復習 第2回：因果推論の基礎 第3回：分布と統計量 第4回：平均の検定・差の検定 第5回：クロス集計と相関係数 第6回：回帰分析 第7回：報告書の作成方法（構成の組み立て） 第8回：報告書の作成方法（ボンチ絵と表・グラフ） 第9回：量的調査の演習（調査の設計） 第10回：量的調査の演習（サンプルデータの分析） 第11回：量的調査の演習（報告書の作成） 第12回：質的調査の演習（調査の設計） 第13回：質的調査の演習（サンプルデータの分析） 第14回：質的調査の演習（報告書の作成） 定期試験：なし			

テキスト

授業の教材は教員が作成し、事前にオンラインで共有する。

参考書・参考資料等

盛山和夫「社会調査法入門」有斐閣ブックス

佐藤郁哉「社会調査の考え方（上）（下）」東京大学出版会

学生に対する評価

第1回～第8回の授業で実施するワーク（5%）×8回（40%）、第9回～14回の演習で実施する小テスト（10%）×6回（60点）

授業科目名： 自然環境と人間社会	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 相馬 拓也
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「社会学、経済学」 ・「社会学、経済学（国際経済を含む。）」		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>本講義は、自然環境と人間社会の歩んできた相互性に目を向け、学生一人一人が地球市民の一員として環境と向き合い、課題解決にコミットする次の感性を学習します。講義では、環境課題の現状整理→人類と自然環境の相互性の理解→最新の研究成果や国際社会の動向の確認→地球市民として自身がどのようにコミットできるか？のシーケンスを学習します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ❖国際社会でも通用する、文化・社会・歴史・民族と環境との相互作用を言葉で説明できるようになる。 ❖固有環境に適応してきた人類の多様な生き様を理解し、生存戦略と環境適応の伝統知や技法を自らの言葉で語る事ができる。 ❖自然環境と人類社会の相互性から人間の感覚・感性の淵源を理解することで、他者と異文化の行為や文化現象をより包括的に理解できるようになる。 <p>上記の到達目標をもとに、とくに2年次以降、人間社会と自然環境の相互調和の構築に向けて、学生個人が各領域での専門性を深めるための環境関連リテラシーを養います。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>人間の社会は自然環境に支えられ、相互に影響を与えながら成立しています。本講義では、人類学・地理学・生態学・社会学などの知見と視座を踏まえつつ、自然環境と人間社会の関係性の奥行を学習します。講義では、21世紀の地球人類の直面する、①環境適応のエスノグラフィ、②動物・植物と人類のインタラクション、③人新世の環境課題、の3つの大分類テーマを設定します。人間社会の生活・文化・経済といった領域が、自然環境との相互作用のなかでどのように発展してきたのか、またどのような課題を生んできたのか、グローバルにケーススタディを踏まえながら検討します。とくに講義担当者の専門とする地理学・人類学・環境保全や国際協力分野などフィールドでの研究実務と実践から、人間社会のさまざまな環境課題の解決に積極的にコミットできる「働く学問」としての環境学の手法と感性を体得します。そのうえで、自身と自然環境との関わりについて、批判的に省みる気づきを得ることを目指します。</p> <p>毎回の講義は、約60分間をレクチャー／30分間はアクティビティ（プレゼン、ディスカッション、ワークショップ、グループワークなど）の機会を設け、授業に能動的に取り組めるアクティブ・ラーニングにより展開します。</p>			

授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）

- 第1回： オリエンテーション～人新世時代《アントロポセン》の環境課題へのアプローチ～
 第2回： 人類のエクメネ拡張：古代世界～産業革命～人新世の世紀へ
 第3回： 大草原の遊牧民から環境共生観を学ぶ
 第4回： ヒマラヤの環境保全とコミュニティ開発
 第5回： 砂漠を生き抜くオアシス都市の生存戦略
 第6回： 野生動物の絶滅と人間社会
 第7回： 現代ハンティングの役割と動物倫理の現在
 第8回： 家畜と食肉問題から変わりゆく農と食の未来を考える
 第9回： 栽培植物のグローバルヒストリー～穀物・ブドウ・茶葉・コーヒー豆の伝播史
 第10回： 大自然への畏怖から精霊・妖怪・防霊術のフォークロアを考察する
 第11回： 視覚メディアが警鐘する環境問題～手塚治虫と宮崎駿の作品を読み直す～
 第12回： アジアの自然災害と減災術のレジリエンス
 第13回： 海洋汚染・ゴミ問題と海産物資源の未来
 第14回： まとめ～人類社会の環境課題と君たちはどう向き合うか？～
 定期試験なし： 課題提出＋グループ・プレゼンテーション

テキスト

特定の書籍をテキストとしては使用しませんが、毎回の講義に前もって参考図書・資料・データ・ウェブサイト・新聞雑誌記事などを提示します。

参考書・参考資料等

『沈黙の春』 R.カーソン (1962) 光文社古典新訳文庫／1,210円

『反穀物の人類史』 J.C.スコット (2019) みすず書房／4,180円

『家畜化という進化』 R.C.フランシス (2019) 白揚社 /3,850円

『食の文明論』 池谷和信 (編) (2022) 農山漁村文化協会／5,646円

『草原の掟』 相馬拓也 (2022) ナカニシヤ出版／6,160円

『レジリエンス人類学』 稲村哲也ほか (編) (2022) 京都大学学術出版会／2,750円

学生に対する評価

①授業参加25%／②アクティビティへの積極性25%／③プレゼン・課題提出50%

※プレゼンテーションは履修者同士も評価シートで相互に評価し、建設的な意見交換の場とするようにします。

授業科目名： 哲学概論	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 相原 博
			担当形態： 単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目 (中学校社会及び高等学校公民)		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「哲学、倫理学、宗教学」 ・「哲学、倫理学、宗教学、心理学」		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>哲学的な思考とはどのようなものか、具体的な問いと答えを紹介することで、哲学という学問の基本的な特徴を理解する。また哲学の基本的な概念を身につけるとともに、日常生活のなかに隠された哲学的な問題を見出し、自分で考察できるようになる。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>哲学における基本的な問いと過去の哲学者による答えを紹介しながら、哲学の基本的な概念について概説する。「認識」「存在」「言語」「生」をはじめとする、哲学のさまざまな問題を体験し検討することで、哲学的な思考の可能性と意義について考える。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：哲学はどのような学問かー哲学の由来とその意味</p> <p>第2回：哲学における思考のあり方ー自分で考えること</p> <p>第3回：哲学における知のあり方ー認識をめぐる問い</p> <p>第4回：哲学はどうして存在を問うのかー存在をめぐる問い</p> <p>第5回：哲学はどうして言語を問うのかー言語をめぐる問い</p> <p>第6回：哲学と生活の結びつきー学問と生の関係について</p> <p>第7回：哲学を学ぶことはできるかー哲学とその教育について</p> <p>第8回：哲学の歴史をどう学ぶかー哲学史と哲学の関係について</p> <p>第9回：哲学は人間と自然をどう考えるかー自然支配から自然との和解へ</p> <p>第10回：哲学は人間の行為をどう考えるかー自由と必然をめぐる問い</p> <p>第11回：哲学は道徳をどう考えるかー行為の原理をめぐる問い</p> <p>第12回：哲学は幸福についてどう考えるかーさまざまな幸福論</p> <p>第13回：哲学は美をどう考えるかー自然美と芸術美について</p> <p>第14回：哲学は人間をどう考えるかー人間とその尊厳について</p> <p>定期試験</p>			
<p>テキスト</p> <p>特に使用しない。必要に応じて資料を配布する。</p>			

参考書・参考資料等

岩崎武雄『西洋哲学史（再訂版）』（有斐閣）

戸田山和久『哲学入門』（ちくま新書）

中島義道『哲学の教科書』（講談社学術文庫）

その他は授業内でそのつど指示する。

学生に対する評価

授業参加度(10%) リアクションペーパー(30%) 期末試験(60%)

授業科目名： 環境倫理	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 富田 涼都 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会及び高等学校公民）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・「哲学、倫理学、宗教学」 ・「哲学、倫理学、宗教学、心理学」		
授業のテーマ及び到達目標 現代において地球的な課題となった「環境問題」は、単に自然環境だけでなく、私たちの科学技術や社会や文化、価値の複合問題でもある。それらの倫理的課題を扱う「環境倫理」は実践に関与する応用倫理であるだけでなく、根底にある人間の在り方生き方や、私たちが考える倫理的対象そのものの問いなおしといった規範倫理やメタ倫理でもある。この講義では、人間の在り方生き方・倫理的対象の拡大などの倫理的な問いから具体的課題としての環境問題を参照し、これからの人類社会において求められる倫理的思考について理解できるようになることを目標とする。			
授業の概要 人にとって環境はどのようなものか。人や社会が環境との間で抱える問題やその解決とはどのようなものか。こうした「環境問題」に直面した人倫の理としての「倫理」は、現場でも思想でもずっと問われてきた。この講義では、その問いと格闘してきた思考や事例をふりかえりながら、私たちが現代の「環境問題」をどう捉えてくべきなのかを考える。2年次以降、各自の関心に応じてあらゆる領域で学びを深めていく際の基礎となる思考、視点を培う科目である。			
授業計画（本学の授業時間は各回 100 分で実施する） 第1回：ガイダンス 第2回：プラネタリーバウンダリー：地球システムからの生命誌的な警告 第3回：人間社会に対する批判：功利主義・機械論的自然観・キリスト教的道徳をめぐる議論 第4回：まもるべき「自然」をめぐる思考：自然権の拡大と「倫理の進化」 第5回：ディーエコロジー論争：社会倫理的批判からみる環境思想 第6回：公害問題から見える社会的不公正：差別・格差からみた環境問題 第7回：環境アクセスから見える社会的不公正：先住民・人種・ジェンダーからの正義論 第8回：環境をめぐる関係論：現象学的視点から見る環境問題 第9回：「守るべきもの」とは何か？：規範倫理を現場にもっていく 第10回：環境破壊によって喪われること：人間の在り方生き方とは何か？ 第11回：「誰の」・「どんな環境」を守るのかを知る：人間の在り方を具体的に省察する 第12回：文化論の落とし穴：文化相対主義と国際政治 第13回：環境保全と社会的公正の両立をめざして：プラグマティックな解決と正義 第14回：講義のまとめ 定期試験			
テキスト なし。適宜資料を提示する。			

参考書・参考資料等

品田哲彦, 2020, 『倫理学入門』, 中公新書.

鬼頭秀一, 1996, 『自然保護を問いなおす』, ちくま新書.

富田涼都, 2014, 『自然再生の環境倫理』, 昭和堂.

その他、適宜提示する。

学生に対する評価

講義中に不定期に課す小課題（20％）と期末試験（80％）

授業科目名： 社会・公民科教育法1	教員の免許状取得のための 必修科目 (中学校社会・高校公民)	単位数： 2単位	担当教員名： (単独担当) 竹内 久顕 (オムニバス担当) 矢野 博之、竹内 久顕 担当形態： クラス分け・単独およびオムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目 (中学校社会及び高等学校公民)		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法 (情報通信技術の活用を含む。)		
授業の到達目標及びテーマ： 中学校社会科及び高等学校公民科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された中学校社会科及び高等学校公民科の学習内容について背景となる学問領域と関連させた理解を深める。それとともに、中学校社会科及び高等学校公民科の様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。			
授業の概要： 学習指導要領に示された中学校社会科及び高等学校公民科の目標・内容・全体構造について理解し、対応する学問領域の特性を踏まえた教材研究の方法について学習する。あわせて、本科目と並行して履修する、あるいは本科目の履修の後に続く「社会・公民科教育法演習1」「社会・公民科教育法2」「社会・公民科教育法演習2」との関連性・継続性を考慮し、本科目の中で、学習指導案の作成の基礎を学び、実際に1単元・1時間の授業設計を行い、学習指導案を各自作成して発表、振り返りを行う。			
授業計画 (本学の授業時間は各回100分で実施する) <クラス分け・単独> (竹内 久顕) 第1回：導入 (目標・概要・進め方) 第2回：社会科・公民科の教育目標について／現行学習指導要領に至るまでの社会科・公民科教育の歩み 第3回：学習指導要領における中学校社会科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について (その1・中学校社会科地理的分野) 第4回：学習指導要領における中学校社会科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について (その2・中学校社会科歴史的分野) 第5回：学習指導要領における中学校社会科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について (その3・中学校社会科公民的分野)			

第6回：学習指導要領における高等学校公民科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その1・「公共」）

第7回：学習指導要領における高等学校公民科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その2・「倫理」）

第8回：学習指導要領における高等学校公民科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その3・「政治・経済」（1）政治領域）

第9回：学習指導要領における高等学校公民科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その4・「政治・経済」（2）経済領域）

第10回：社会科・公民科における教材及びICTの活用法について

第11回：社会科・公民科における授業設計と学習指導案の作成について

第12回：社会科・公民科学習指導案の作成・発表・改善策の検討（その1・中学校社会科）

第13回：社会科・公民科学習指導案の作成・発表・改善策の検討（その2・高等学校公民科科目（1）公共）

第14回：社会科・公民科学習指導案の作成・発表・改善策の検討（その3・高等学校公民科科目（2）倫理、政治・経済）／まとめ。学習指導案の作成と発表についての全体での振り返り。

<クラス分け・オムニバス>（矢野 博之、竹内 久顕）

第1回：導入（目標・概要・進め方）（担当：矢野 博之）

第2回：社会科・公民科の教育目標について／現行学習指導要領に至るまでの社会科・公民科教育の歩み（担当：矢野 博之）

第3回：学習指導要領における中学校社会科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その1・中学校社会科地理的分野）（担当：竹内 久顕）

第4回：学習指導要領における中学校社会科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その2・中学校社会科歴史的分野）（担当：竹内 久顕）

第5回：学習指導要領における中学校社会科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その3・中学校社会科公民的分野）（担当：矢野 博之）

第6回：学習指導要領における高等学校公民科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その1・「公共」）（担当：矢野 博之）

第7回：学習指導要領における高等学校公民科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その2・「倫理」）（担当：矢野 博之）

第8回：学習指導要領における高等学校公民科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その3・「政治・経済」（1）政治領域）（担当：矢野 博之）

第9回：学習指導要領における高等学校公民科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その4・「政治・経済」（2）経済領域）（担当：矢野

博之)

第10回：社会科・公民科における教材及びICTの活用法について（担当：竹内 久顕）

第11回：社会科・公民科における授業設計と学習指導案の作成について（担当：竹内 久顕）

第12回：社会科・公民科学習指導案の作成・発表・改善策の検討（その1・中学校社会科）
（担当：竹内 久顕）

第13回：社会科・公民科学習指導案の作成・発表・改善策の検討（その2・高等学校公民科科目（1）公共）（担当：竹内 久顕）

第14回：社会科・公民科学習指導案の作成・発表・改善策の検討（その3・高等学校公民科科目（2）倫理、政治・経済）／まとめ。学習指導案の作成と発表についての全体での振り返り。（担当：竹内 久顕）

テキスト：

『中学校学習指導要領』『中学校学習指導要領解説－社会編－』『高等学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領－公民編－』

参考書・参考資料等：

授業中に適宜紹介、資料を配付する。

学生に対する評価：

レポート試験（60%）、授業中の発表内容（40%）

授業科目名： 社会・公民科教育法 2	教員の免許状取得のための 必修科目（中学校）	単位数： 2単位	担当教員名： 菅間 正道、小島 健太郎 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ： 中学校社会科及び高等学校公民科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された中学校社会科及び高等学校公民科の学習内容について背景となる学問領域と関連させた理解を深める。それとともに、中学校社会科及び高等学校公民科の様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。			
授業の概要： 中学校社会科及び高等学校公民科の学習内容について、情報機器及び教材の効果的な活用法を理解した上で、履修者各自が活用法を考えた授業設計を行い、その授業計画を発表、振り返りを行う。あわせて、中学校社会科及び高等学校公民科の分野・科目に即した年間指導計画の作成・発表、学習評価の模擬的実践（学習指導案の「生徒観」に即応した定期試験用の試験問題の作成・発表）などを通して、より実践的に授業設計の向上に取り組む力量を養成する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：導入（目標・概要・進め方） 第2回：情報機器及び教材の活用の実践例紹介（中学校社会科の具体例） 第3回：情報機器及び教材の活用の実践例紹介（高等学校公民科の具体例） 第4回：発展的な学習内容についての探究と実践例紹介（中学校社会科の具体例） 第5回：発展的な学習内容についての探究と実践例紹介（高等学校公民科の具体例） 第6回：グループワークを採り入れた授業設計の実践例紹介（中学校社会科の具体例） 第7回：グループワークを採り入れた授業設計の実践例紹介（高等学校公民科の具体例） 第8回：年間指導計画の作成・発表（1）中学校社会科地理的分野 第9回：年間指導計画の作成・発表（2）中学校社会科歴史的分野 第10回：年間指導計画の作成・発表（3）中学校社会科公民的分野 第11回：年間指導計画の作成・発表（4）高等学校公民科その1（「公共」） 第12回：年間指導計画の作成・発表（5）高等学校公民科その2（「倫理」「政治・経済」） 第13回：学習評価の模擬的実践（その1・中学校社会科） 第14回：学習評価の模擬的実践（その2・高等学校公民科）／まとめ。実施した年間指導計			

<p>画の発表についての履修者相互の振り返りと各自の改訂プラン作成。</p> <p>定期試験は実施しない。</p>
<p>テキスト：</p> <p>『中学校学習指導要領』 『中学校学習指導要領解説－社会編－』 『高等学校学習指導要領』 『高等学校学習指導要領－公民編－』</p>
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業中に適宜紹介、資料を配付する。</p>
<p>学生に対する評価：</p> <p>年間指導計画の発表内容（40%）、発表についての改訂プランの内容（60%）</p>

授業科目名： 社会・公民科教育法 演習 1	教員の免許状取得のための 必修科目 (中学社会・高校公民)	単位数： 2単位	担当教員名： (単独担当) 竹内 久顕 (オムニバス担当) 矢野 博 之、竹内 久顕 担当形態： クラス分け・単独およびオム ニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目 (中学校社会及び高等学校公 民)		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法 (情報通信技術の活用を含む。)		
授業の到達目標及びテーマ： 中学校社会科及び高等学校公民科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学 習指導要領に示された中学校社会科及び高等学校公民科の学習内容について背景となる学問領 域と関連させた理解を深める。それとともに、中学校社会科及び高等学校公民科の様々な学習 指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。			
授業の概要： 「社会・公民科教育法 1」で学習したことをもとに、学習指導要領に示された教科の目標及 び内容を踏まえ、中学校社会科及び高等学校公民科の各分野・科目について、履修者各自が 1 単元・1 時間分の範囲について教材研究を行って教材を作成し、学習指導案を準備した上で模 擬授業を行う。模擬授業の実施とその振り返りを通して、中学生・高校生の発達段階、学力状 況の多様性に応じた授業設計ができる力量を養成する。あわせて、教材及び ICT の活用法、学 習評価の考え方の基礎的理解についても実践的に学ぶ。			
授業計画 (本学の授業時間は各回100分で実施する) <クラス分け・単独> (竹内 久顕) 第1回：導入 (目標・概要・進め方) (模擬授業実施についての概略説明) 第2回：中学生・高校生の発達段階、学力状況の多様性を踏まえた授業設計について (異なる「生徒観」の学級での授業設計について) 第3回：教材及びICTの活用法の概略 (実践例の学習) 第4回：模擬授業 (1) 中学校社会科地理的分野 第5回：模擬授業 (2) 中学校社会科歴史的分野 第6回：模擬授業 (3) 中学校社会科公民的分野その1 (現代社会単元・経済単元) 第7回：模擬授業 (4) 中学校社会科公民的分野その2 (政治単元・国際社会の諸課題単元) 第8回：模擬授業 (5) 高等学校公民科科目 (「公共」その1 公共の扉単元)			

- 第9回：模擬授業（6）高等学校公民科科目（「公共」その2 社会参画单元）
- 第10回：模擬授業（7）高等学校公民科科目（「公共」その3 持続可能な社会づくり单元）
- 第11回：模擬授業（8）高等学校公民科科目（「倫理」その1 現代に生きる自己の課題单元）
- 第12回：模擬授業（9）高等学校公民科科目（「倫理」その2 現代の諸課題と倫理单元）
- 第13回：模擬授業（10）高等学校公民科科目
（「政治・経済」その1 現代日本における政治・経済の諸課題单元）
- 第14回：模擬授業（11）高等学校公民科科目（「政治・経済」その2 グローバル化する国際社会の諸課題单元）／まとめ。実施した模擬授業についての履修者相互の振り返りと各自の改訂案作成。
- <クラス分け・オムニバス>（矢野 博之、竹内 久顕）
- 第1回：導入（目標・概要・進め方）（模擬授業実施についての概略説明）
（担当：矢野 博之）
- 第2回：中学生・高校生の発達段階、学力状況の多様性を踏まえた授業設計について
（異なる「生徒観」の学級での授業設計について）（担当：竹内 久顕）
- 第3回：教材及びICTの活用法の概略（実践例の学習）（担当：竹内 久顕）
- 第4回：模擬授業（1）中学校社会科地理的分野（担当：竹内 久顕）
- 第5回：模擬授業（2）中学校社会科歴史的分野（担当：竹内 久顕）
- 第6回：模擬授業（3）中学校社会科公民的分野その1（現代社会单元・経済单元）
（担当：矢野 博之）
- 第7回：模擬授業（4）中学校社会科公民的分野その2（政治单元・国際社会の諸課題单元）
（担当：矢野 博之）
- 第8回：模擬授業（5）高等学校公民科科目（「公共」その1 公共の扉单元）
（担当：矢野 博之）
- 第9回：模擬授業（6）高等学校公民科科目（「公共」その2 社会参画单元）
（担当：矢野 博之）
- 第10回：模擬授業（7）高等学校公民科科目（「公共」その3 持続可能な社会づくり单元）
（担当：矢野 博之）
- 第11回：模擬授業（8）高等学校公民科科目（「倫理」その1 現代に生きる自己の課題单元）
（担当：矢野 博之）
- 第12回：模擬授業（9）高等学校公民科科目（「倫理」その2 現代の諸課題と倫理单元）
（担当：矢野 博之）
- 第13回：模擬授業（10）高等学校公民科科目
（「政治・経済」その1 現代日本における政治・経済の諸課題单元）
（担当：矢野 博之）
- 第14回：模擬授業（11）高等学校公民科科目（「政治・経済」その2 グローバル化する国際社会

の諸課題単元) /まとめ。実施した模擬授業についての履修者相互の振り返りと各自の改訂案作成。(担当: 矢野 博之)

テキスト:

『中学校学習指導要領』 『中学校学習指導要領解説－社会編－』 『高等学校学習指導要領』 『高等学校学習指導要領－公民編－』

参考書・参考資料等:

授業中に適宜紹介、資料を配付する。

学生に対する評価:

模擬授業の発表内容 (40%)、発表後の振り返りを踏まえた改訂案の内容 (60%)

授業科目名： 社会・公民科教育法 演習 2	教員の免許状取得のための 必修科目（中学校）	単位数： 2単位	担当教員名： 菅間 正道、小島 健太郎 担当形態：クラス分け・単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校社会）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ： 中学校社会科及び高等学校公民科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された中学校社会科及び高等学校公民科の学習内容について背景となる学問領域と関連させた理解を深める。それとともに、中学校社会科及び高等学校公民科の様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。			
授業の概要： 「社会・公民科教育法 2」で学習したことをもとに、学習指導要領に示された教科の目標及び内容を踏まえ、中学校社会科及び高等学校公民科の各分野・科目について、履修者各自が作成した教材及び ICT の効果的な活用を考えた授業設計に基づき、模擬授業を実施する。実施後に履修者相互の振り返りを行い、改善点を見出し、改訂プランを作成することを通して、教材及び ICT の活用実践的かつ発展的に取り組むことのできる力量を養成する。あわせて実践研究の動向を学び、中学生・高校生の実態に即した授業設計とその実践に取り組むことのできる教科の授業実践者としての資質を高める。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：導入（目標・概要・進め方） 第2回：主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実践例 （中学校社会科 1 地理的分野・歴史的分野） 第3回：主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実践例 （中学校社会科 2 公民的分野） 第4回：主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実践例 （高等学校公民科 1 公共） 第5回：主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実践例 （高等学校公民科 2 倫理、政治・経済） 第6回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 （教材及び ICT の活用法・その 1－社会科地理的分野） 第7回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 （教材及び ICT の活用法・その 2－社会科歴史的分野） 第8回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表			

<p>(教材及びICTの活用法・その3－社会科公民的分野(1)現代社会単元・経済単元)</p> <p>第9回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表</p> <p>(教材及びICTの活用法・その4－社会科公民的分野(2) 政治単元・国際社会の諸課題単元)</p> <p>第10回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表</p> <p>(教材及びICTの活用法・その5－公民科「公共」(1) 公共の扉単元・社会参画単元)</p> <p>第11回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表</p> <p>(教材及びICTの活用法・その6－公民科「公共」(2) 持続可能な社会づくり単元)</p> <p>第12回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表</p> <p>(教材及びICTの活用法・その7－公民科「倫理」)</p> <p>第13回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表</p> <p>(教材及びICTの活用法・その8－公民科「政治・経済」(1) 現代日本における政治・経済の諸課題単元)</p> <p>第14回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表</p> <p>(教材及びICTの活用法・その9－公民科「政治・経済」(2) グローバル化する国際社会の諸課題単元)／まとめ。実施した模擬授業形式の活用法発表についての履修者相互の振り返りと各自の改訂プラン作成。</p>
<p>テキスト：</p> <p>『中学校学習指導要領』『中学校学習指導要領解説－社会編－』『高等学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領－公民編－』</p>
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業中に適宜紹介、資料を配付する。</p>
<p>学生に対する評価：</p> <p>模擬授業の発表内容(40%)、発表後の振り返りを踏まえた改訂版の内容(60%)</p>

授業科目名： 環境物理学基礎	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 山本 絢子、川上 言美 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・物理学		
授業のテーマ及び到達目標 物理学の基本概念や原理を習得し、自然現象や環境問題を科学的に理解する力を養う。力学、電磁気学、波動などの基礎を学び、それらを環境問題に応用できる能力を身につけ、物理的視点から環境現象を考察できるようになることを目標とする。			
授業の概要 環境問題の理解と解決に向けて必要な物理学の基本的な概念と原理を学ぶ。この授業では、力学の概念を中心に学び、さらに、電磁気学や波の性質など、基礎的な物理学について学ぶ。また、発展科目である「熱力学」「地球流体力学」「エネルギー科学」といった科目の導入的な役割を果たす。これらを通して学生は、物理学の基本的な概念・法則・考え方を学び、様々な自然現象を科学的にとらえる基礎を習得する。物理法則を環境問題に応用する姿勢を学び、環境現象を物理的に理解し、物理的な問題解決のアプローチを身につけることが期待される。また、この科目は環境科学の他の領域と物理学を結びつけ、より広範な視野で環境問題を考察するための基礎となる知識を提供する。 (オムニバス方式／全14回) (山本絢子／7回) 力学 (川上言美／7回) 電磁気学			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：単位と次元解析、力とベクトル（担当：山本絢子） 第2回：力のモーメントのモーメントのつりあい（担当：山本絢子） 第3回：運動の法則、重力による運動（担当：山本絢子） 第4回：円運動、振動（担当：山本絢子） 第5回：仕事とエネルギー（担当：山本絢子） 第6回：力学的エネルギー保存則（担当：山本絢子） 第7回：運動量と角運動量（担当：山本絢子） 第8回：波動の表し方（担当：川上言美） 第9回：シュレーディンガー方程式（担当：川上言美） 第10回：前期量子論（担当：川上言美）			

第11回：ボーア半径（担当：川上言美）

第12回：電荷・電解・電位（担当：川上言美）

第13回：電位と電流、磁場と電流（担当：川上言美）

第14回：電磁誘導（担当：川上言美）

定期試験

テキスト

大学新生のための力学著（西浦宏幸・田中東著、共立出版）

参考書・参考資料等

ベクトル解析（理工系の数学入門コース3）（戸田盛和 著、岩波書店）

学生に対する評価

学期末定期試験（60%）および複数回実施する課題（40%）で評価する。

授業科目名： 熱力学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 下ヶ橋 雅樹
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・物理学		
授業のテーマ及び到達目標			
<ul style="list-style-type: none"> ・熱力学の基本的な法則や原理の意味を学び、その数学的な表現が理解できる。 ・気候変動やエネルギー問題に取り組むうえでの熱力学的な基本が身につく。 			
授業の概要			
<p>エネルギーの変換と物質の状態変化に関する基本的な法則と原理を学ぶ。熱力学の第一法則と第二法則を中心に、エネルギー保存とエントロピーの概念を理解する。また、熱機関の効率や可逆・不可逆過程、自由エネルギーの役割についても学び、エネルギー変換の限界と可能性を探る。さらに、相平衡や化学平衡の概念を取り上げ、物質の状態変化や反応の進行における熱力学的視点を深める。実際の環境問題、例えば気候変動やエネルギー資源の利用における熱力学的考察も行い、持続可能なエネルギー利用のための科学的基盤を築く。環境科学における熱力学の応用についての知識を習得し、エネルギー問題の解決に寄与する能力を育成する。</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：イントロダクション、物質とエネルギー、物質の状態変化			
第2回：ボイル・シャルルの法則、理想気体と実在気体、分子運動			
第3回：内部エネルギー、熱力学的第一法則、熱容量、潜熱			
第4回：熱機関とその効率、等温変化と断熱変化			
第5回：カルノーサイクル、オットーサイクル			
第6回：エンタルピーの定義、物理過程のエンタルピー			
第7回：反応過程のエンタルピー			
第8回：熱力学の第二法則、永久機関、エントロピーの定義			
第9回：不可逆過程・可逆過程とエントロピー			
第10回：ギブスの自由エネルギー、ヘルムホルツの自由エネルギー			
第11回：状態量変化、フガシティーとフガシティー係数、マックスウェルの関係式			
第12回：相と状態図、示強因子と示量因子、臨界点、クラウジウス・クラペイロンの式			
第13回：化学ポテンシャル、ギブスの相律、ギブス・ヘルムホルツの式、活量と活量係数			
第14回：化学反応と平衡、平衡定数、ファント・ホッフの式、均一反応と不均一反応			
テキスト			
[1]相良紘（2012）はじめて学ぶ化学工学のための熱力学、日刊工業新聞、ISBN:9784526068188			

参考書・参考資料等

[2] 庄司良/下ヶ橋雅樹著 (2018) 基礎からわかる環境化学 (物質工学入門シリーズ)、森北出版、ISBN:13978-4627245914

学生に対する評価

中間テスト (40%) 最終テスト (40%)

講義中に課す演習課題や宿題 (20%)

授業科目名： 地球流体力学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 山本 絢子
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・物理学		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>地球流体力学の基礎理論を学び、大気と海洋の動態を理解する力を養う。流体の運動方程式、回転と成層の影響、渦度、波動現象など、地球システム内の基本的な力学プロセスを学び、気候変動や異常気象などの地球環境問題に関連する実践的な解析を行うための基礎的な知識を習得することを目標とする。</p>			
授業の概要			
<p>地球流体力学の基礎と応用を学ぶ科目である。本授業では、大気および海洋の動態を理解するための流体力学の基本的な理論と数的手法を扱う。流体の運動方程式、回転、成層、渦度、波動現象といった地球環境に特有の力学プロセスに焦点をあて、地球システムのダイナミクスを解析する能力を養う。具体的には、ナビエ-ストークス方程式、地衡風理論、波動の基本、不安定性、大気および海洋の大循環に関する理論を学ぶ。これらを通じて気候システムの理解を深め、気候変動や異常気象といった地球環境問題の解析に役立つ知識を習得することを目指す。</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：地球流体力学の基礎			
第2回：回転と成層の影響			
第3回：浅水系とその応用			
第4回：渦度と渦位			
第5回：準地衡渦位			
第6回：波動の基礎			
第7回：中緯度の不安定性理論			
第8回：大気大循環			
第9回：ジェット気流と波-平均流相互作用			
第10回：中緯度大気循環			
第11回：熱帯気象学			
第12回：海洋大循環の基礎構造および風成循環			
第13回：深層循環と熱塩循環の力学			
第14回：海洋と気候の相互作用と変動			
定期試験			

テキスト

なし

参考書・参考資料等

Atmospheric and Oceanic Fluid Dynamics: Fundamentals and Large-Scale Circulation
(Geoffrey K. Vallis 著、Cambridge University Press)

地球環境を学ぶための流体力学（九州大学大学院総合理科学府大気海洋環境システム学専攻
編、成山堂書店）

学生に対する評価

学期末定期試験（60%）および複数回実施する課題（40%）で評価する。

授業科目名： 環境化学基礎	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 小林 潤司、下ヶ橋 雅樹 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・化学		
授業のテーマ及び到達目標 到達目標 ・環境問題において取り扱うことの多い物質を対象として原子構造や化学結合、分子の種類やそのふるまいを学ぶことで、環境中の化学物質の挙動とそのメカニズム、各種の対策技術の原理が理解できる。また、物質変化の基本原則として化学反応の基礎を理解し、その化合物合成の手段としての応用についての知識を得る。自然界での物質変化や動態変化の根底としての平衡の化学の原理を理解する。			
授業の概要 環境中での化学物質の振る舞いやそれが環境および人間に与える影響を理解するための基礎的な化学の概念と原理を学ぶ。この授業では、まず化学の基本的な概念、すなわち、原子構造、化学結合、化学反応の基礎から始め、酸・塩基反応、酸化還元反応、光化学反応など、環境に特有の化学反応を理解するための基礎的な平衡の化学や、無機化学、有機化学について総説的に学ぶ。学生は環境問題を化学的に理解し、実践的な解決策を導くための知識とスキルを習得するための基礎を学ぶ。 (オムニバス方式／全14回) (下ヶ橋雅樹／7回) 原子構造と化学結合 (小林潤司／7回) 化学反応			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：環境化学とは、化学物質による環境汚染（担当：下ヶ橋雅樹） 第2回：元素と原子、原子の構造（担当：下ヶ橋雅樹） 第3回：単体と化合物、分子軌道、無機分子と有機分子、金属分子（担当：下ヶ橋雅樹） 第4回：物質の三態、超臨界、過冷却、天然高分子と合成高分子、疎水性、親水性、電離平衡（担当：下ヶ橋雅樹） 第5回：電子の共有と共有結合、結合エネルギー、配位結合、イオン結合、共鳴構造と分子の安定、分子の振動、双極子モーメント（担当：下ヶ橋雅樹） 第6回：金属結合と自由電子、半導体、水素結合、ファンデルワールス力（担当：下ヶ橋雅樹） 第7回：移流と拡散、気液平衡、ラウールの法則、ヘンリーの法則、コロイドと凝集沈殿、平均自由			

行程 (担当: 下ヶ橋雅樹)

第8回: 化学反応概論 (担当: 小林潤司)

第9回: さまざまな化学反応 (担当: 小林潤司)

第10回: 可逆反応と不可逆反応、平衡の化学 (担当: 小林潤司)

第11回: 酸塩基平衡・水溶液平衡 (担当: 小林潤司)

第12回: 反応速度と化学熱力学 (担当: 小林潤司)

第13回: 核化学 (担当: 小林潤司)

第14回: 有機化合物と生化学 (担当: 小林潤司)

定期試験

テキスト

適宜配布・紹介する

参考書・参考資料等

[1] 庄司良/下ヶ橋雅樹著 (2018) 基礎からわかる環境化学 (物質工学入門シリーズ)、森北出版、ISBN:13978-4627245914

[2] 渡辺正訳 (2012) 地球環境化学入門 改訂版、丸善、ISBN:978-4-621-06126-8 (原著: An Introduction to Environmental Chemistry, Second Edition)

学生に対する評価

定期試験 (70%)

平常時評価 (30%): 講義中の態度、ミニテストや課題

授業科目名： 環境毒性学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 高田 秀重
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・化学		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>環境と資源問題、なかでも化学物質と生物の問題に関して基本的な知識を理解し、問題意識をもつことができる。</p> <p>また、人類が直面する食料・生命・資源・環境問題に関わる自然科学研究の理解のため、科学的に思考する素養を身につけることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>環境毒性学は、環境中に放出される化学物質の動態から、生体毒性、生態影響まで幅広い分野をカバーしている。しかし、その方法論さえ未だ議論の対象となっているのが現状である。本講義は、環境毒性学を成立させた環境問題全体の把握から、毒性学の基礎、化学物質汚染の事例を概説する。それらの事例を通して、化学物質の構造や物性とその物質の環境動態および毒性を支配していることを学ぶ。本講義を通じて、個人個人が環境問題について考える「基礎」の涵養を目的とする。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：概説：汚染物質の定義と環境汚染化学の目的、汚染物質の発生源</p> <p>第2回：概説：汚染物質の動態と物性（揮発性、疎水性）の関係</p> <p>第3回：ポリ塩化ビフェニル(PCBs)、有機ハロゲン化合物の構造と発生源</p> <p>第4回：ポリ塩化ビフェニル(PCBs)、有機ハロゲン化合物の物性と挙動</p> <p>第5回：ダイオキシン</p> <p>第6回：臭素系難燃剤</p> <p>第7回：多環芳香族炭化水素(PAHs)</p> <p>第8回：石油汚染</p> <p>第9回：合成洗剤汚染</p> <p>第10回：フッ素系界面活性剤</p> <p>第11回：環境ホルモン</p> <p>第12回：プラスチック汚染と環境ホルモン</p> <p>第13回：海洋プラスチック汚染と環境ホルモン</p> <p>第14回：医薬品、抗生物質</p> <p>定期試験なし</p>			
テキスト			

「環境汚染化学」丸善出版 水川薫子・高田秀重著

参考書・参考資料等

Environmental Organic Chemistry by R.P. Schwarzenbach et al. Wiley-International

学生に対する評価

授業参加度（授業各回で実施するリアクションペーパー）60%、期末レポート（40%）により評価する

授業科目名： 材料化学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 小林 潤司
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・化学		
授業のテーマ及び到達目標 材料の構成成分となる化合物の性質を理解し、その集合体としての材料の特性と関連づけて理解できるようになる。			
授業の概要 物質の構造、性質、および性能を理解し、これらの相関関係を理解することを目的とした科目である。この授業では、プラスチックや金属、半導体、セラミックスや複合材料などの主要な材料の特性とそれらの応用について学ぶ。具体的には、材料の構造、相構造、熱的性質、電氣的などの基礎的な概念を取り上げる。また、材料の加工技術や表面処理、材料の劣化と寿命評価、再利用とリサイクルの技術にも焦点を当てる。持続可能な社会への変革を意識し、持続可能な材料の開発やエコマテリアルの設計についても学ぶ。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：材料化学ガイダンス 第2回：物質の性質と電子の関わり 第3回：物質を構成する原子と結合 第4回：電気伝導性と半導体特性 第5回：金属材料と半導体 第6回：炭素化合物の特性と多様性 第7回：ポリマー材料とプラスチック 第8回：色素：染料・顔料・液晶・ディスプレイ材料 第9回：油脂・界面活性剤 第10回：香料・香辛料・化粧品 第11回：医薬・農薬 第12回：有機フッ素化合物 第13回：有機材料と環境 第14回：電気エネルギーと核エネルギー 定期試験			
テキスト 授業中に資料を適宜配付する			
参考書・参考資料等			

「材料有機化学」伊与田正彦編著、朝倉書店、ISBN：978-4-254-25564-5

学生に対する評価

授業内小テスト（30%）、中間試験（30%）、最終試験（40%）で総合的に評価する。

授業科目名： 地球化学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 高田 秀重、角野 浩史 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・化学		
授業のテーマ及び到達目標 環境資源科学において基本的な物質循環の理論と地球化学的研究手法を理解できるようになること。			
<p>授業の概要</p> <p>地球の化学的な構成要素とその変遷、ならびに地球の物質循環に関する基本的な原理とプロセスを学ぶ。この授業では、地球表層の元素分布、炭素や窒素などの元素に注目した物質循環と同位体を用いた研究手法についても学ぶ。物質循環と環境問題との関連についてもふれ、オゾン層破壊などの地球規模の環境問題も取り上げる。地球の物質循環における化学的過程を科学的に探求するスキルを養うことを目指す。</p> <p>（オムニバス方式／全14回） （高田秀重／7回） 元素循環 （角野浩史／7回） 同位体地球化学</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：イントロダクション（担当：高田秀重） 第2回：水の循環（担当：高田秀重） 第3回：炭素の循環と地球温暖化（担当：高田秀重） 第4回：マーカを使った汚染の解析（担当：高田秀重） 第5回：窒素循環と環境問題（担当：高田秀重） 第6回：リン循環と環境問題（担当：高田秀重） 第7回：マーカを使った汚染の解析（担当：高田秀重） 第8回：同位体地球科学の基礎（担当：角野浩史） 第9回：同位体生態学（担当：角野浩史） 第10回：同位体水文学（担当：角野浩史） 第11回：同位体汚染化学（担当：角野浩史） 第12回：大気のための基礎科学入門（担当：角野浩史） 第13回：地球大気の構（担当：角野浩史） 第14回：オゾン層破壊と温室効果（担当：角野浩史）</p>			

定期試験なし

テキスト

毎回配付、あるいはLMSにアップする資料をもとに講義を行う。

参考書・参考資料等

Biogeochemistry by Schlesinger (ISBN 0-12-625155-X)

学生に対する評価

出席および授業参加度 (20%)、中間レポート (40%)、最終レポート (40%) により評価する。

授業科目名： 環境生物学基礎	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 大久保（大沼） 奈弥、 宮田（清野） 佳奈 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・生物学		
授業のテーマ及び到達目標 生物学や生態学の基本概念を学び、環境問題について科学的に考える基盤を形成する。			
<p>授業の概要</p> <p>生物と環境の相互作用を理解し、環境問題の解決に向けた基礎的な生物学の知識を学ぶことを目的とした科目である。この授業では、細胞、遺伝や代謝といった生物学の基礎的な知識に加え、生態系の構造と機能、生物多様性の重要性、種間および種内の相互作用、エネルギーの流れと物質循環など、環境生物学の基本概念を中心に学ぶ。さらに、地球規模での生態系の変化や人間活動による影響、例えば森林破壊、気候変動、外来種の侵入、生物多様性の減少といった現代の環境問題についても講義の中で触れていく。この科目を通して、学生は環境保全や生態系管理において、科学的な根拠に基づいた判断を下すために必要な生物学の知識と視点を習得する。</p> <p>（オムニバス方式／全14回） （大久保奈弥／7回）</p> <p>種の分類と多様性 （宮田佳奈／7回）</p> <p>生物の構造と機能</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回： 生物多様性をなぜ守る必要があるのか～人間社会に与える恩恵（担当：大久保奈弥）</p> <p>第2回： 多様な生物が持つ共通性（担当：宮田佳奈）</p> <p>第3回： 生物の基本単位—細胞（担当：宮田佳奈）</p> <p>第4回： 生物の構造と分化（担当：宮田佳奈）</p> <p>第5回： 次の世代につなぐプログラム（担当：宮田佳奈）</p> <p>第6回： 代謝と元素の循環（担当：宮田佳奈）</p> <p>第7回： 個体内での情報の統合（担当：宮田佳奈）</p> <p>第8回： 個体外への情報発信（担当：宮田佳奈）</p> <p>第9回： 種の多様性（担当：大久保奈弥）</p> <p>第10回： 生物間相互作用（担当：大久保奈弥）</p> <p>第11回： 生態系の多様性1～陸上生態系（担当：大久保奈弥）</p>			

第12回： 生態系の多様性2～海洋生態系（担当：大久保奈弥） 第13回： 生態系の破壊による生物多様性の損失（担当：大久保奈弥） 第14回： 生物多様性を保全するための様々な生態系管理の例（担当：大久保奈弥） 定期試験
テキスト 特に指定しない。
参考書・参考資料等 キャンベル生物学（原書11版）著者名，池内 昌彦 監訳 伊藤 元己 監訳 箸本 春樹 監訳 道上 達男 監訳．発行元，丸善出版．発行年月日，2018年03月
学生に対する評価 定期試験（60%）、授業の最後に提出する小レポートなどの授業参加度（40%）

授業科目名： 陸上生物学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 佐野 雅規、上遠 岳彦 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・生物学		
授業のテーマ及び到達目標 陸上生物と環境の相互作用について、物質循環やエネルギーの流れ、人間活動と関連付けて理解し、その知識を生物多様性の保全や持続可能な開発に活かすことができる。			
授業の概要 陸上に生息する生物の多様性、進化、生態学、行動、およびそれらが環境とどのように相互作用しているかを理解することを目的とした科目である。植物、動物、菌類などの陸上生物の分類について学び、これらがどのようにして進化し、陸上環境に適応してきたかを探るとともに、生態系内での役割や相互作用について学ぶ。具体的なトピックには、陸上生物の進化的適応、陸上での栄養やエネルギーの循環が含まれる。また、森林、草原、砂漠、湿地などのさまざまな陸上生態系における生物群の相互作用、食物連鎖、群集動態、生物多様性についても取り扱う。陸上生物の多様性と生態系の機能に対する深い理解を得るとともに、自然保護や環境管理の実践的なスキルを身につけることを目指す。 (オムニバス方式／全14回) (佐野雅規／7回) 陸上植物の生物学的構造、生態学 (上遠岳彦／7回) 陸上動物の生物学的構造、生態学			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：講義の概要、生物の多様性（佐野） シラバスレビュー、生命の誕生と陸上進出、遺伝子・種・生態系の多様性 第2回：植生分布とその規定要因（佐野） 全球・地域スケール、気候帯、人間活動、過去の植生 第3回：陸上生態系の構造と動態（佐野） 種組成とその時間的変化、有機物の生産・消費・分解、繁殖 第4回：陸上生態系の物質循環（佐野） 水、炭素、窒素の動態と循環 第5回：植生史（佐野） 人と植物の関係史、環境変動、古生態学 第6回：現在の人間活動と陸上生態系（佐野）			

<p>土地改変、資源利用、気候変動</p> <p>第7回：森林生態系の保全と管理（佐野） 森林の多面的機能、生態系サービス、持続可能な利用</p> <p>第8回：陸上生物の進化と環境適応（上遠） 自然選択、遺伝的浮動、共進化</p> <p>第9回：陸上動物の地理的分布と多様性（上遠） 生物地理区、気候・植生との対応</p> <p>第10回：生物間の相互作用（上遠） 種内・種間競争、寄生、共生</p> <p>第11回：生物群集の構造と維持機構（上遠） 被食・捕食、食物網、キーストーン種</p> <p>第12回：生物の地理的変異（上遠） 隔離、遺伝的・形質的差異、種分化</p> <p>第13回：人為的な環境改変と陸上動物への影響（上遠） 森林伐採、河川改変、気候変動</p> <p>第14回：野生動物の保全と管理（上遠） 生息地の保全・修復、外来種・感染症対策、人との共存</p>
<p>テキスト</p> <p>適宜配布・紹介する</p>
<p>参考書・参考資料等</p> <p>『生態系生態学 第2版』Chapinら（加藤知道 監訳），2018，森北出版</p> <p>『森林生態学』石井広明（編集代表）2019，朝倉書店</p> <p>『生態学入門（第2版）』日本生態学会 編集，2012，東京化学同人</p>
<p>学生に対する評価</p> <p>平常時評価(100%)：各講義内での演習課題・宿題(50%)、中間テスト(25%)、最終テスト(25%)</p>

授業科目名： 微生物学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 布柴 達男 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・生物学		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>1. 微生物の分類や細胞の構造、機能についての基本的な知識を習得する。</p> <p>2. 微生物を材料として解明されてきたDNA組み換え、突然変異、DNA損傷の修復などの遺伝学的な生命現象の分子機構について理解する。</p> <p>3. 食品産業、医薬品開発、農業、環境保全などの産業分野への微生物利用、または微生物が原因の諸問題などの経緯と現状を理解したうえで、人間社会への貢献と課題について考察する。</p>			
授業の概要			
<p>微生物の構造、機能、分類、そして生態系における役割を理解することを目的とした科目。この授業では、細菌、ウイルス、真菌、藻類、原生動物などの微生物の基本的な生物学的特性を学び、微生物の成長や代謝、遺伝子の構造と発現、環境中での役割に焦点を当てる。また、微生物の生態学的役割、例えば分解者としての機能や、炭素、窒素、硫黄などの物質循環における重要性についても探る。さらに、バイオテクノロジーにおける微生物の利用も取り上げる。学生は微生物の多様な機能と環境、産業、医療分野での応用について深い理解を得て、環境や人間社会における微生物の役割を科学的に考察できる能力を養う。</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回： イントロダクション -微生物の定義と歴史？-			
第2回： 地球環境の微生物たち 細菌類			
第3回： 地球環境の微生物たち 真菌類・古細菌など			
第4回： 地球環境の微生物たち 極限環境微生物 苔の中の微生物の観察			
第5回： 微生物の分子遺伝学への貢献 遺伝情報はいかに子孫に伝えられるか？			
第6回： 微生物の分子遺伝学への貢献 遺伝情報はいかに解読されるか？			
第7回： 微生物の分子遺伝学への貢献 遺伝情報はいかに発現調節されるか？			
第8回： 中間テスト			
第9回： 応用微生物 In Class グループワーク			
第10回： 微生物の遺伝的多様性と多様性を導く要因			
第11回： 微生物の危機管理体制とゲノム不安定化			
第12回： 毒性学への微生物の貢献 微生物であぶり出された身近な発がん物質			
第13回： プレゼンテーション			

第14回：プレゼンテーション・まとめ

定期試験：試験は中間のみ。期末はレポート

テキスト

適宜，プリントなどを配付する。

参考書・参考資料

基礎生物学講座11「微生物—バイオテクノロジー入門」（朝倉書店）

伊藤正博ら著「極限環境生命—生命の起源を考え、その多様性に学ぶ—」（コロナ社）

エッセンシャル「遺伝学」（培風館） その他、必要に応じて授業内で紹介する。

学生に対する評価

授業への積極的な参加（出席とリフレクション）（30%）、中間テスト（40%）、グループワークへの積極的な参加とレポート（30%）

授業科目名： 海洋生物学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 大久保（大沼） 奈弥
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・生物学		
授業のテーマ及び到達目標 海洋生物とその生息環境の科学的理解を深めるとともに、持続可能な海洋資源の利用や生態系の保全に貢献するための知識と実践的スキルを習得する			
授業の概要 海洋に生息する生物の分類、生態、およびそれらが環境とどのように相互作用しているかを理解することを目的とした科目である。この授業では、海洋に生息する生物、その生理・生態、海洋生態系の多様性など、広範囲にわたるトピックを学ぶ。具体的には、プランクトン、植物ベントス、動物ベントス、ネクトンなどの海洋生物の分類や生態に関する知識を深め、海洋生物の繁殖、成長、適応戦略や、海洋環境における種間・種内相互作用も探る。また、サンゴ礁や干潟や深海の生態系についても学習する。海洋生物とその生息環境の科学的理解を深めるとともに、持続可能な海洋資源の利用や生態系の保全に貢献するための知識と実践的スキルを習得することを目指す。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：海洋生物学入門 第2回：非生物的環境 第3回：種とは何か 第4回：植物プランクトンと一次生産 第5回：動物プランクトン 第6回：食物連鎖 第7回：ネクトン（甲殻類・頭足類・爬虫類・哺乳類） 第8回：海鳥・海産魚類 第9回：水産海洋学・栽培漁業 第10回：植物ベントス（海草、海藻など） 第11回：動物ベントス（多毛類、貝類など） 第12回：潮間帯環境 第13回：砂浜、マングローブなどの干潟、サンゴ礁の生態系 第14回：海洋生態系の衰退 定期試験 テキスト			

なし
参考書・参考資料等 『生物海洋学入門』第2版, Carol M. Lalli and Timothy R. Parsons, 監訳:關文威, 訳:長沼毅, 講談社
学生に対する評価 定期試験100%

授業科目名： 分子生物学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 宮田（清野） 佳奈 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・生物学		
授業のテーマ及び到達目標 分子生物学の知識を身につけ、地球環境でおこる様々な現象を科学的な視点からとらえる事ができるようになる。			
授業の概要 生物の生命活動を分子レベルで理解することを目的とした科目であり、この授業では、DNAやタンパク質といった生体分子の構造と機能に焦点を当て、それらが細胞内でどのように生命現象を支えているかを学ぶ。主要なトピックには、細胞、遺伝、分子生物学、代謝、などが含まれる。さらに、遺伝子改変に関して、理論的な視野からの学びに加えて、倫理的な側面からの理解も深め、批判的な思考を身につける。また、分子レベルから生物現象を理解することで、バイオテクノロジー、遺伝子工学、農業、医療などの応用分野における、実践的な知識を身につけるとともに、地球環境を多角的な視点から評価できるようになることを目指す。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンス 第2回：生物を構成する分子 第3回：DNAとタンパク質 第4回：細胞のつくりと機能 第5回：古典遺伝学から分子遺伝学へ 第6回：生殖 第7回：バイオテクノロジー 第8回：蛍光と発光とライブイメージング 第9回：ゲノム解析 第10回：代謝 第11回：光合成 第12回：生物が作り出す様々な物質 第13回：遺伝子組換え 第14回：生命科学の産業利用 定期試験			
テキスト 授業中に適宜資料を配付する。			

参考書・参考資料等

キャンベル生物学（原書11版）著者名，池内 昌彦 監訳 伊藤 元己 監訳 箸本 春樹 監訳 道上 達男 監訳．発行元，丸善出版．発行年月日，2018年03月

学生に対する評価

定期試験（50％）、授業内で行われる小テストや授業参加度（50％）

授業科目名： 環境地学基礎	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 山本 絢子、小宮 剛
			担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・地学		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>地球の内部構造や、それを取り巻く大気と海洋の構造や動態を理解し、地球システム全体を包括的に捉える力を養う。地震や火山活動、大気および海洋循環などの物理的・化学的プロセスを理論的に説明できるようになること、さらに地球システムの働きと環境問題への影響を科学的に考察できるようになることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>地球の物理的・化学的プロセスと環境との関連を理解するための基礎的な知識を学ぶ。前半では、宇宙の誕生から始まり地球の内部構造、プレートテクトニクス、火山活動、地震、風化、堆積といった地質学の基本概念を取り上げ、それらが環境にどのように影響を与えるかを探る。後半では、地球を取り巻く大気と海洋の構造と動態について学ぶ。具体的には、大気および海洋の構造および大循環、熱収支、雲形成の仕組み、大気と海洋の相互作用について取り上げ、地球システムにおける大気と海洋の働きについての理解を深める。また、人間活動が地球の自然プロセスに及ぼす影響やそれに対する持続可能な解決策についても考察する。</p> <p>（オムニバス方式／全14回）</p> <p>（山本絢子／7回）</p> <p>大気と気象</p> <p>（小宮剛／7回）</p> <p>宇宙と地球の内部構造</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：宇宙の構造と歴史（担当：山本絢子）</p> <p>第2回：太陽系と地球の誕生（担当：山本絢子）</p> <p>第3回：地球の内部構（担当：山本絢子）</p> <p>第4回：プレートテクトニクス（担当：山本絢子）</p> <p>第5回：火山と地震（担当：山本絢子）</p> <p>第6回：岩石の種類と成因（担当：山本絢子）</p> <p>第7回：様々な鉱物・鉱床（担当：山本絢子）</p> <p>第8回：大気構造・雲と降水（担当：小宮剛）</p> <p>第9回：地球の熱収支（担当：小宮剛）</p> <p>第10回：大気の運動（担当：小宮剛）</p>			

第11回：海洋の構（担当：小宮剛）

第12回：海洋大循環（担当：小宮剛）

第13回：大気と海洋の相互作用（担当：小宮剛）

第14回：大気・海洋と人間（担当：小宮剛）

定期試験

テキスト

はじめて学ぶ大学教養地学（杉本憲彦、杵島正洋、松本直記、慶應義塾大学出版会）

参考書・参考資料等

授業時に適宜指示する

学生に対する評価

学期末定期試験（60%）および複数回実施するミニテスト（40%）で評価する。

授業科目名： 気候学	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 山本 絢子、関澤 偲温 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・地学		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>地球の気候システムとその動的なプロセスを理解し、気候変動に関する科学的な知識を身につけることを目指す。気候システム内でのエネルギーバランス、大気、海洋、陸地の相互作用、さらには自然のおよび人的要因による気候変動のメカニズムを探求する。また、気候モデルやフィードバックの理解を通じて、気候の予測手法や過去・現在・未来における気候変動のメカニズムの理解を深めることを目標とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>地球の気候システムの基本構造とそのプロセスを理解し、気候システムを科学的に捉えるための基礎的知識とスキルを身につけると共に、気候変動が人間社会や環境に与える影響を科学的に考察する力を養う科目。この授業では、大気と海洋の構造と循環、気候システムのエネルギーのバランス、海洋、大気、陸地の相互作用、水循環、気候変動のメカニズムなどを包括的に学ぶ。また、エルニーニョ現象などの自然変動に加え、温室効果ガスの増加による人為的気候変動も取り扱う。また、気候モデルや気候感度、フィードバックメカニズムを通して、過去・現在・未来の気候を科学的に解析する方法を習得し、気候科学が現実社会の課題解決にどう役立つかを学ぶことを目指す。</p> <p>（オムニバス形式／全14回） （山本絢子／7回）</p> <p>気候変動とそのメカニズム （関澤偲温／7回） 気候システムにおけるエネルギーバランス</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：気候システムの概要（担当：山本絢子） 第2回：地球のエネルギーバランス（担当：山本絢子） 第3回：大気の放射伝達と気候（担当：山本絢子） 第4回：地表のエネルギーバランス（担当：山本絢子） 第5回：水循環（担当：山本絢子） 第6回：大気の大循環と気候（担当：山本絢子） 第7回：海洋の大循環と気候（担当：山本絢子） 第8回：気候の季節内および年々変動（担当：関澤偲温）</p>			

第9回：地球史と気候変化（担当：関澤偲温） 第10回：気候感度とフィードバックメカニズム（担当：関澤偲温） 第11回：地球規模気候モデル（担当：関澤偲温） 第12回：自然的要因で発生する気候変動（担当：関澤偲温） 第13回：人為的要因で発生する気候変動（担当：関澤偲温） 第14回：気候変動の科学と社会への応用（担当：関澤偲温） 定期試験
テキスト なし
参考書・参考資料等 Global Physical Climatology, Second Edition (Dennis L. Hartmann 著、Elsevier Science) 地球気候学（安成哲三 著、東京大学出版会）
学生に対する評価 学期末定期試験（60%）および複数回実施する課題（40%）で評価する。

授業科目名： 環境化学実習	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 小林 潤司、下ヶ橋 雅樹 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・物理学実験・化学実験・生物学実験・地学実験 ・「物理学実験、化学実験、生物学実験、地学実験」		
授業のテーマ及び到達目標 河川水や海洋プラスチック、大気、土壌サンプルの採取と測定を経験することで、環境現場観測の進め方や基本的な分析方法を習得する。			
授業の概要 環境化学の理論を実践的に理解し、環境中の化学物質の分析と評価を行うための技術の習得を目的とした科目。本実習では、実際の水（河川や海水）などの環境サンプルを採取するところから行い、化学物質の抽出、分離、定量分析の基本的な技術を学ぶ。各種分析機器の使用方法や、化学分析のための標準操作手順の実践を行う。また、実験データの処理と解析、データの信頼性の評価方法も取り扱う。架空のサンプルではなく、海洋プラスチックの採取など、実際の環境問題をテーマにしたプロジェクトを通じて、学生は化学分析結果をもとに環境汚染の状況の評価する。これにより、学生は分析データがどのような過程を通してえられ、どの程度の信頼性のもとに議論されるのかを学ぶ。また、実際の化学反応を行い、物質変換の基礎を体験するとともに、物質の精製過程についても体験する。 (オムニバス方式／全14回) (下ヶ橋雅樹／7回) 水溶液の分析 (小林潤司／7回) 大気の実験、土壌の実験			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンス、基本的な化学分析機器の取り扱い（担当：下ヶ橋雅樹） 第2回：現場測定の準備（担当：下ヶ橋雅樹） 第3回：河川水のサンプリング（担当：下ヶ橋雅樹） 第4回：河川水の分析（1）手分析（担当：下ヶ橋雅樹） 第5回：河川水の分析（2）機器分析（担当：下ヶ橋雅樹） 第6回：海洋プラスチックのサンプリング（担当：下ヶ橋雅樹） 第7回：海洋プラスチックの実験（担当：下ヶ橋雅樹） 第8回：大気中の二酸化炭素濃度の簡易測定（担当：小林潤司） 第9回：土壌の化学分析：含水率、pHの測定（担当：小林潤司）			

第10回：土壌の化学分析：無機態窒素の定量：アンモニウムの定量、硝酸の定量

(担当：小林潤司)

第11回：土壌の化学分析：有機体窒素の定量 (担当：小林潤司)

第12回：薬効成分の抽出と定量 (担当：小林潤司)

第13回：Grignard反応を用いた有機合成反応 (担当：小林潤司)

第14回：化合物の精製：抽出、蒸留、再結晶 (担当：小林潤司)

テキスト

適宜配布・紹介する

参考書・参考資料等

[1] 中嶋亮太、山下麗 (2020) 海洋マイクロプラスチックの採取・前処理・定量方法、海の研究29(5)、129-151 (doi: 10.5928/kaiyou.29.5_129)

学生に対する評価

レポート試験 (70点)

実習中の態度 (20点)

ミニテスト (10点)

授業科目名： 環境生命実習	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 大久保（大沼） 奈弥、 宮田（清野） 佳奈 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・物理学実験・化学実験・生物学実験・地学実験 ・「物理学実験、化学実験、生物学実験、地学実験」		
授業のテーマ及び到達目標 自然環境における問題解決のための科学的アプローチを養うことを目的とする。			
授業の概要 自然環境の変化が生き物にどのような影響を与えているのかを調べ、環境問題への理解を深めることを目的とした実習科目である。前半は、海洋無脊椎動物を用いて、水温やpH、マイクロプラスチックなど、現在問題になっている要因が生き物にどのような影響をもたらすのか、各自が独自の視点で観察と実験をおこない、その結果と考察を発表する。後半は、フィールドから植物の共生菌を探索し、接種実験や観察を行うとともに、過剰に施肥を行った際の菌根菌の感染状態の解析を行う。加えて、分子生物学における様々な技術に実際に触れて理解を深めるとともに、得られたデータを統計的に処理し、客観的に評価する手法を学習する。これらの実習を通して、自然環境における問題解決のための科学的アプローチ方法を知り、理解を深める。 (オムニバス方式／全14回) (大久保奈弥／7回) 動物実習 (宮田佳奈／7回) 植物・微生物分子生物学実習			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：イントロダクション（担当：大久保奈弥・宮田佳奈） 第2回：モデル動物として扱うイソギンチャクと共生藻の飼育方法と観察（担当：大久保奈弥） 第3回：各班で実験内容の議論・設定（担当：大久保奈弥） 第4回：実験（例：水温やpH等の環境要因、マイクロプラスチックや堆積物など）（担当：大久保奈弥） 第5回：データ解析（担当：大久保奈弥） 第6回：報告書もしくは発表資料の作成方法（担当：大久保奈弥） 第7回：発表会（担当：大久保奈弥） 第8回：野外の根粒菌の単離・培養（担当：宮田佳奈）			

第9回：菌根菌の接種実験（担当：宮田佳奈）

第10回：根粒菌からゲノム抽出・PCR（担当：宮田佳奈）

第11回：電気泳動・シーケンスによる種の同定（担当：宮田佳奈）

第12回：野外の菌根菌の単離と観察（担当：宮田佳奈）

第13回：菌根菌接種実験の感染率測定（担当：宮田佳奈）

第14回：根粒菌共生の表現型解析・発表会（担当：宮田佳奈）

テキスト

特になし

参考書・参考資料等

菌根の世界：菌と植物のきってもきれない関係 著者：齋藤雅典 出版社：築地書館

学生に対する評価

テーマごとの複数回のレポート（80%）、および第7回・第14回発表会での発表内容（各10%）

授業科目名： 気象学実習	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 関澤 偲温 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・物理学実験・化学実験・生物学実験・地学実験 ・「物理学実験、化学実験、生物学実験、地学実験」		
授業のテーマ及び到達目標 気象・気候分野の研究する上で必要となるフィールドでの観測・実験手法および気象や海洋データの解析手法の基礎を身につけることを目標とする。			
授業の概要 気象観測手法・実験手法およびその解析手法を実践的に学ぶことを目的とする。前半では、気象観測の基礎を学び、得られた観測データを主にExcelを用いて解析する。一地点における気象観測から得られるデータを通じて、特定地域の気象現象を理解する力を養う。後半では、2次元および3次元の気象・気候データを活用し、Pythonを用いて空間パターンや長期変動の解析手法を学ぶ。地域スケールの観測データと全球スケールのデータ解析から、気象現象や気候変動の階層的な関連性を理解することを目的とする。本授業では、理論と実践を組み合わせたアプローチを通じて、観測データの活用や解析スキルを深めることを目指す。また、科学的データ解析に基づいて結論を導き出す力を育成するとともに、気象学・気候学に関する基礎知識の習得を促進することを目標とする。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンス、気象観測・実験および解析の基礎 第2回：気象観測・解析（気温） 第3回：気象観測・解析（湿度） 第4回：気象観測・解析（風向・風速） 第5回：気象観測・解析（気圧） 第6回：気象観測・理論（雲） 第7回：雲の発生モデル実験 第8回：水蒸気柱モデル実験 第9回：台風モデル実験 第10回：気温・降水量の日変化解析 第11回：気温・降水量の長期変動解析 第12回：海面水温・気温の気候値・長期変動空間パターン解析 第13回：海面水温・気温のコンポジット解析 第14回：海面水温・気温の回帰分析定期試験			

テキスト
各回プリントを配布する。
参考書・参考資料等
観測・実験・モデルで伝える気象教育（榊原保志 著・成山堂書店） 統計から見た気象の世界（藤部文昭 著・成山堂書店）
学生に対する評価
実験レポート（複数回）（70%）および授業参画度・課題への取り組み（30%）

授業科目名： 理科総合実験	教員の免許状取得のための 必修科目	単位数： 2単位	担当教員名： 北本 俊二、山中 正浩、 岡 敏彦、清家 一馬、 渡部 智博
			担当形態：複数・オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目（中学校及び高等学校理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	教科に関する専門的事項 ・物理学実験・化学実験・生物学実験・地学実験 ・「物理学実験、化学実験、生物学実験、地学実験」		
授業のテーマ及び到達目標 この授業では、地学、物理学、化学、生物学の分野でそれぞれ3種類の実験を行い、それぞれの分野での実験の基礎知識と実験手法、実験に対する素養、およびデータの扱い方を習得することを目的とする。			
授業の概要 初回にガイダンスを行う。ガイダンスでは、テキスト・スケジュール表などを配付し、実験を行うにあたっての安全教育、注意事項やレポートの書き方、提出方法などについて説明する。事前に実験指針をよく読み、実験の目的・内容を把握した上で実験を始めること。事故を起こさないためにも実験中は必ず担当教員の指示に従うこと。実験によってはグラフ用紙、定規、色鉛筆（赤、青、紫、桃）、関数電卓、PCなどが必要であるので各自適切なものを持参すること。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンス、安全教育、レポート作成について（担当：北本俊二、渡部智博） 第2回：地学実験1（地形図判読）（担当：清家一馬） 第3回：地学実験2（地質図学演習）（担当：清家一馬） 第4回：地学実験3（天気図作成）（担当：清家一馬） 第5回：物理学実験1（振り子の特性）（担当：北本俊二） 第6回：物理学実験2（光の分光）（担当：北本俊二） 第7回：物理学実験3（電子回路）（担当：北本俊二） 第8回：化学実験1（匂いの化学に関する実験・分析）（担当：山中正浩） 第9回：化学実験2（錯体化学に関する実験・分析）（担当：渡部智博） 第10回：化学実験3（実験の化学的な理解と振り返り）（担当：山中正浩、渡部智博） 第11回：生物学実験1（PCR法によるゲノムDNA分析）（担当：岡敏彦） 第12回：生物学実験2（組織レベルでのゲノム多様性分析）（担当：岡敏彦） 第13回：生物学実験3（タンパク質の定量分析）（担当：岡敏彦） 第14回：まとめ（担当：北本俊二、渡部智博）			

定期試験 なし
テキスト テキストはCanvas LMSで配布する。
参考書・参考資料等 資料はCanvas LMSで配布する。
学生に対する評価 平常点：出席態度とレポートによる総合評価(100%)

授業科目名： 理科教育法1	教員の免許状取得のための 必修科目 (中学校・高等学校)	単位数： 2単位	担当教員名： 渡部 智博 担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目 (中学校及び高等学校 理科)		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ： 理科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された理科の学習内容について背景となる学問領域と関連させた理解を深める。それとともに、理科の様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。			
授業の概要： 学習指導要領に示された中学校及び高等学校理科の目標・内容・全体構造について理解し、対応する学問領域の特性を踏まえた教材研究の方法について学習する。あわせて、本科目と並行して履修する、あるいは本科目の履修の後に続く「理科教育法演習1」「理科教育法2」「理科教育法演習2」との関連性・継続性を考慮し、本科目の中で、学習指導案の作成の基礎を学び、実際に1単元・1時間の授業設計を行い、学習指導案を各自作成して発表、振り返りを行う。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：導入（目標・概要・進め方） 第2回：理科の教育目標について／現行学習指導要領に至るまでの理科教育の歩み 第3回：学習指導要領における中学校理科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その1・第1分野） 第4回：学習指導要領における中学校理科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その2・第2分野） 第5回：学習指導要領における高等学校理科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その1・「科学と人間生活」） 第6回：学習指導要領における高等学校理科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その2・「物理基礎」「物理」） 第7回：学習指導要領における高等学校理科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その3・「化学基礎」「化学」） 第8回：学習指導要領における高等学校理科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習評価の考え方について（その4・「生物基礎」「生物」） 第9回：学習指導要領における高等学校理科の目標・内容・全体構造と教材研究の方法・学習			

評価の考え方について（その5・「地学基礎」「地学」）

第10回：理科における情報機器及び教材の活用法について

第11回：理科における授業設計と学習指導案の作成について

第12回：理科学習指導案の作成・発表・改善策の検討（その1・中学校理科）

第13回：理科学習指導案の作成・発表・改善策の検討（その2・高等学校理科科目（1）物理・化学関係科目）

第14回：理科学習指導案の作成・発表・改善策の検討（その3・高等学校理科科目（2）生物・地学関係科目）／まとめ。学習指導案の作成と発表についての全体での振り返り。

テキスト：

『中学校学習指導要領』『中学校学習指導要領解説－理科編－』『高等学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領－理科編－』

参考書・参考資料等：

授業中に適宜紹介、資料を配付する。

学生に対する評価：

レポート試験（60%）、授業中の発表内容（40%）

授業科目名： 理科教育法 2	教員の免許状取得のための 必修科目（中学校）	単位数： 2単位	担当教員名： 渡部 智博
			担当形態：単独
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目 （中学校 理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ： 理科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された理科の学習内容について背景となる学問領域と関連させた理解を深める。それとともに、理科の様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。			
授業の概要： 中学校及び高等学校理科の学習内容について、情報機器及び教材の効果的な活用法を理解した上で、履修者各自が活用法を考えた授業設計を行い、その授業計画を発表、振り返りを行う。あわせて、理科の分野・科目に即した年間指導計画の作成・発表、学習評価の模擬的実践（学習指導案の「生徒観」に即応した定期試験用の試験問題の作成・発表）などを通して、より実践的に授業設計の向上に取り組む力量を養成する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：導入（目標・概要・進め方） 第2回：教材及びICT活用法の実践例紹介（中学校理科の具体例） 第3回：教材及びICT活用法の実践例紹介（高等学校理科の具体例） 第4回：発展的な学習内容についての探究と実践例紹介（中学校理科の具体例） 第5回：発展的な学習内容についての探究と実践例紹介（高等学校理科の具体例） 第6回：グループワークを採り入れた授業設計の実践例紹介（中学校理科の具体例） 第7回：グループワークを採り入れた授業設計の実践例紹介（高等学校理科の具体例） 第8回：年間指導計画の作成・発表（1）中学校理科第1分野 第9回：年間指導計画の作成・発表（2）中学校理科第2分野 第10回：年間指導計画の作成・発表（3）高等学校理科「科学と人間生活」 第11回：年間指導計画の作成・発表（4）高等学校理科物理・化学関係科目 第12回：年間指導計画の作成・発表（5）高等学校理科生物・地学関係科目 第13回：学習評価の模擬的実践（その1・中学校理科） 第14回：学習評価の模擬的実践（その2・高等学校理科）／まとめ。実施した年間指導計画の発表についての履修者相互の振り返りと各自の改訂プラン作成。			
テキスト：			

『中学校学習指導要領』 『中学校学習指導要領解説－理科編－』 『高等学校学習指導要領』
『高等学校学習指導要領－理科編－』

参考書・参考資料等：

授業中に適宜紹介、資料を配付する。

学生に対する評価：

年間指導計画の発表内容（40%）、発表についての改訂プランの内容（60%）

授業科目名： 理科教育法演習 1	教員の免許状取得のための 必修科目 (中学校・高等学校)	単位数： 2単位	担当教員名： 島野 誠大、墨野倉 伸彦 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目 (中学校及び高等学校 理科)		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ： 理科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された理科の学習内容について背景となる学問領域と関連させた理解を深める。それとともに、理科の様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。			
授業の概要： 「理科教育法1」で学習したことをもとに、学習指導要領に示された教科の目標及び内容を踏まえ、中学校及び高等学校理科の各分野・科目について、履修者各自が1単元・1時間分の範囲について教材研究を行って教材を作成し、学習指導案を準備した上で模擬授業を行う。模擬授業の実施とその振り返りを通して、中学生・高校生の発達段階、学力状況の多様性に応じた授業設計ができる力量を養成する。あわせて、教材及びICTの活用法、学習評価の考え方の基礎的理解についても実践的に学ぶ。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：導入（目標・概要・進め方）（模擬授業実施についての概略説明）（担当：墨野倉） 第2回：中学生・高校生の発達段階、学力状況の多様性を踏まえた授業設計について（異なる「生徒観」の学級での授業設計について）（担当：墨野倉） 第3回：教材及びICT活用法の概略（実践例の学習）（担当：島野） 第4回：模擬授業（1）中学校理科（第1分野（1）物理領域）（担当：島野） 第5回：模擬授業（2）中学校理科（第1分野（2）化学領域）（担当：島野） 第6回：模擬授業（3）中学校理科（第2分野（1）生物領域）（担当：墨野倉） 第7回：模擬授業（4）中学校理科（第2分野（2）地学領域）（担当：墨野倉） 第8回：模擬授業（5）高等学校理科科目（「科学と人間生活」）（担当：島野） 第9回：模擬授業（6）高等学校理科科目（「物理基礎」「物理」）（担当：島野） 第10回：模擬授業（7）高等学校理科科目（「化学基礎」）（担当：島野） 第11回：模擬授業（8）高等学校理科科目（「化学」）（担当：島野） 第12回：模擬授業（9）高等学校理科科目（「生物基礎」）（担当：墨野倉） 第13回：模擬授業（10）高等学校理科科目（「生物」）（担当：墨野倉） 第14回：模擬授業（11）高等学校理科科目（「地学基礎」「地学」）／まとめ。実施した模擬授			

業についての履修者相互の振り返りと各自の改訂案作成。（担当：墨野倉）
テキスト： 『中学校学習指導要領』『中学校学習指導要領解説－理科編－』『高等学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領－理科編－』
参考書・参考資料等： 授業中に適宜紹介、資料を配付する。
学生に対する評価： 模擬授業の発表内容（40%）、発表後の振り返りを踏まえた改訂案の内容（60%）

授業科目名： 理科教育法演習 2	教員の免許状取得のための 必修科目（中学校）	単位数： 2単位	担当教員名： 島野 誠大、墨野倉 伸彦 担当形態：オムニバス
科 目	教科及び教科の指導法に関する科目 （中学校 理科）		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	各教科の指導法（情報通信技術の活用を含む。）		
授業の到達目標及びテーマ： 理科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された理科の学習内容について背景となる学問領域と関連させた理解を深める。それとともに、理科の様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身につける。			
授業の概要： 「社会・公民科教育法2」で学習したことをもとに、学習指導要領に示された教科の目標及び内容を踏まえ、中学校社会科及び高等学校公民科の各分野・科目について、履修者各自が作成した教材及び ICT の効果的な活用を考えた授業設計に基づき、模擬授業を実施する。実施後に履修者相互の振り返りを行い、改善点を見出し、改訂プランを作成することを通して、教材及び ICT の活用実践的かつ発展的に取り組むことのできる力量を養成する。あわせて実践研究の動向を学び、中学生・高校生の実態に即した授業設計とその実践に取り組むことのできる教科の授業実践者としての資質を高める。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：導入（目標・概要・進め方）（担当：墨野倉） 第2回：主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実践例 （中学校理科第1分野）（担当：島野） 第3回：主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実践例 （中学校理科第2分野）（担当：墨野倉） 第4回：主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実践例 （高等学校「科学と人間生活」「物理基礎」「物理」「化学基礎」「化学」）（担当：島野） 第5回：主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実践例 （高等学校「生物基礎」「生物」「地学基礎」「地学」）（担当：墨野倉） 第6回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 （教材及び ICT の活用法・その1－中学校第1分野（1）物理領域）（担当：島野） 第7回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 （教材及び ICT の活用法・その2－中学校第1分野（2）化学領域）（担当：島野）			

<p>第8回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 (教材及びICTの活用法・その3－中学校第2分野(1)生物領域) (担当：墨野倉)</p> <p>第9回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 (教材及びICTの活用法・その4－中学校第2分野(2)地学領域) (担当：墨野倉)</p> <p>第10回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 (教材及びICTの活用法・その5－「科学と人間生活」) (担当：島野)</p> <p>第11回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 (教材及びICTの活用法・その6－「物理基礎」「物理」) (担当：島野)</p> <p>第12回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 (教材及びICTの活用法・その7－「化学基礎」「化学」) (担当：島野)</p> <p>第13回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 (教材及びICTの活用法・その8－「生物基礎」「生物」) (担当：墨野倉)</p> <p>第14回：履修者各自による模擬授業形式の活用法発表 (教材及びICTの活用法・その9－「地学基礎」「地学」) /まとめ。実施した模擬授業形式の活用法発表についての履修者相互の振り返りと各自の改訂プラン作成。(担当：墨野倉)</p>
<p>テキスト：</p> <p>『中学校学習指導要領』『中学校学習指導要領解説－理科編－』『高等学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領－理科編－』</p>
<p>参考書・参考資料等：</p> <p>授業中に適宜紹介、資料を配付する。</p>
<p>学生に対する評価：</p> <p>模擬授業の発表内容(40%)、発表後の振り返りを踏まえた改訂版の内容(60%)</p>

授業科目名： 教職特別演習	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 森田 満夫 担当形態：単独
科 目	大学が独自に設定する科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等			
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>3年次以上の問題意識の高い学生を対象とし、いまの教育現場では避けられないテーマー例えば人権・愛国心・いじめ問題・新自由主義教育改革の理論と実相・戦後教育学の成果と課題などーについて深め、教職に関する課題意識をより明確にすることを目的とする。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>概論的科目で学んだことに基づきつつ、今日の学校教育に関してより深く、実践的な内容を取り扱っていく。学校・授業に関する多面的なアプローチ・理解ができるように、主として、テーマー人権・愛国心・いじめ問題などーについての論文などを取り上げて、検討・ディスカッションを行う。初回に担当者から発題を行い、以後、文献などを検討対象ごとに、毎回参加者が分担して発表を行い、参加者全員でディスカッションを行う形式を進めることを予定している。具体的な進め方に関しては、初回授業時に受講学生と相談の上決定する。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：発題</p> <p>第2回：日本国憲法・子どもの権利条約の教育理念に関する論文等の報告</p> <p>第3回：日本国憲法・子どもの権利条約の教育理念に関する論文等の報告を受けて検討・ディスカッション</p> <p>第4回：いじめ問題に関する論文等の報告</p> <p>第5回：いじめ問題に関する論文等の報告を受けて検討・ディスカッション</p> <p>第6回：不登校問題に関する論文等の報告</p> <p>第7回：不登校問題に関する論文等の報告をうけて検討・ディスカッション</p> <p>第8回：校則問題に関する論文等の報告</p> <p>第9回：校則問題に関する論文等の報告をうけて検討・ディスカッション</p> <p>第10回：愛国心と道徳教育に関する論文等の報告</p> <p>第11回：愛国心と道徳教育に関する論文等の報告を受けて検討・ディスカッション</p> <p>第12回：新自由主義教育改革に関する論文等の報告</p> <p>第13回：新自由主義教育改革に関する論文等の報告を受けて検討・ディスカッション</p> <p>第14回：総括討論</p>			
<p>テキスト</p> <p>授業時に指示する。</p>			

参考書・参考資料等

授業時に適宜，紹介する。

学生に対する評価

最終レポート(40%)、小レポート(30%)、授業参加度(30%)

授業科目名： 日本国憲法	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 大石 和彦
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	日本国憲法		
授業のテーマ及び到達目標 日本国憲法およびその背景にある近代立憲主義という考え方につき理解する。			
授業の概要 日本国憲法につき、その歴史的背景、起草者意図、判例等を参照したり、諸外国との比較にも目配りしつつ、概論的講義を行う。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：憲法とは何か？ 第2回：近代立憲主義と日本国憲法 第3回：基本的人権1：人権の主体 第4回：基本的人権2：人権侵害の主体 第5回：国会1：議員 第6回：国会2：二院制 第7回：国会3：国会の権限 第8回：国会4：国会の活動法 第9回：まとめと補遺 第10回：内閣1：内閣の構成 第11回：内閣2：内閣の権能 第12回：平和主義 第13回：裁判所と司法権 第14回：まとめと補遺			
テキスト 初宿正典・他 編著 『目で見える憲法【第6版】』有斐閣 2024			
参考書・参考資料等 渋谷秀樹・赤坂正浩 『憲法1人権（第8版）』（有斐閣アルマ）有斐閣 2022 渋谷秀樹・赤坂正浩 『憲法2統治（第8版）』（有斐閣アルマ）有斐閣 2022			
学生に対する評価 筆記試験 80% 平常点 20%授業録画内の随所で課される小テスト(20%)			

授業科目名： 憲法 1	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 大石 和彦
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	日本国憲法		
授業のテーマ及び到達目標 日本国憲法第3章所定の基本的人権に関する諸規定の規範的意味内容を理解すること。			
授業の概要 日本国憲法第3章所定の人権条項につき、その歴史的背景、起草者意図、判例等を参照したり、諸外国との比較にも目配りしつつ、概論的講義を行う。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：人権総論1：人権の主体 第2回：人権総論2：人権侵害の主体 第3回：包括的基本権 第4回：平等権 第5回：精神的自由権1：思想・良心の自由 第6回：精神的自由権2：表現の自由 第7回：精神的自由権3：信教の自由・学問の自由 第8回：経済的自由権1：営業の自由 第9回：経済的自由権2：財産権 第10回：人身の自由 第11回：国務請求権 第12回：社会権 第13回：参政権 第14回：補遺またはまとめ			
テキスト 初宿正典他編著 『目で見える憲法〔第6版〕』 有斐閣 2024			
参考書・参考資料等 芦部信喜・高橋和之補 『憲法（第8版）』 岩波書店 2023 渋谷秀樹・赤坂正浩 『憲法1 人権（第8版）』（有斐閣アルマ）有斐閣 2022			
学生に対する評価 筆記試験 100%			

授業科目名： 憲法 2	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 大石 和彦
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	日本国憲法		
授業のテーマ及び到達目標 日本国憲法のうち、いわゆる「三権」を中心とする部分につき理解する。			
授業の概要 日本国憲法のうち、いわゆる「三権」を中心とする部分につき、その歴史的背景、起草者意図、判例等を参照したり、諸外国との比較にも目配りしつつ、概論的講義を行う。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：憲法とは何か？ 第2回：近代立憲主義 第3回：国会（1）：議員 第4回：国会（2）：両院制 第5回：国会（3）：国会の権限 第6回：国会（4）：会期・その他 第7回：これまでの補遺またはまとめ 第8回：内閣（1）：議院内閣制 第9回：内閣（2）：内閣の構成 第10回：内閣（3）：内閣の権限・その他 第11回：裁判所（1）：裁判所の構成・審級制 第12回：裁判所（2）：裁判所の権限 第13回：裁判所（3）：違憲審査制 第14回：全体の補遺またはまとめ			
テキスト 初宿正典他編著 『目で見える憲法〔第6版〕』 有斐閣 2024			
参考書・参考資料等 芦部信喜・高橋和之補 『憲法（第8版）』 岩波書店 2023 渋谷秀樹・赤坂正浩 『憲法2 統治（第8版）』（有斐閣アルマ）有斐閣 2022			
学生に対する評価 筆記試験 100%			

授業科目名： 憲法（2）	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 岡野 誠樹
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	日本国憲法		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>憲法学の体系のうち、講学上の「統治機構論」に該当する領域について、正確な理解を得る。判例・学説の蓄積を資源として、自ら問題を把握し、説得力ある議論を展開する能力を涵養することが、期待される。</p>			
授業の概要			
<p>日本国憲法が定める統治機構の全体設計への視点が疎かにならないよう意を用いつつ、個々の裁判例、学説間の対立が、いかなる具体的な問題について議論を重ねてきたか、丁寧に講述する。具体的な解釈論と関連性を有する範囲で、抽象度の高い理論的な問題にも立ち入るが、両者の間の連関は常に意識して講義を進める。適宜、比較法的な指摘も織り交ぜていきたいと考えている。</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：導入（1）：主権・権力分立			
第2回：導入（2）：デモクラシー			
第3回：国会（1）：選挙制度			
第4回：国会（2）：二院制			
第5回：国会（3）：国会議員			
第6回：議会による行政統制			
第7回：議院内閣制			
第8回：内閣制度・独立行政委員会			
第9回：安全保障			
第10回：司法（1）：裁判官制度と司法権の独立			
第11回：司法（2）：違憲審査制			
第12回：地方自治			
第13回：財政			
第14回：憲法改正問題			
テキスト			
長谷部恭男 『憲法〔第8版〕』 新世社 2018			
参考書・参考資料等			
なし			

学生に対する評価

筆記試験 100%

授業科目名： スポーツプログラム 1	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 吉田 真咲 担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標 クラシックバレエの基本ポジションやパ（＝ステップ）を体験し、習得することによって、正しい姿勢や自分の身体の動きをコントロールする方法を身に付けていく。また、簡単なコンビネーションを行うことによって得られる心身への影響や踊る楽しさを知ることが目標とする。			
授業の概要 クラシックバレエの入門者、初心者を対象に、基礎エクササイズを体験することから始め、簡単なコンビネーションを行い、振付けられた簡単なグループ作品を踊り、発表する。各授業において、ストレッチングや筋コンディショニングも行う。また、クラシックバレエを行うことによって向上する体力について解説をする。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンスと作品鑑賞 第2回：ストレッチングと筋コンディショニング 第3回：クラシックバレエの基礎～足のポジション～ 第4回：クラシックバレエの基礎～腕のポジション～ 第5回：クラシックバレエの基礎～脚の動き～ 第6回：クラシックバレエの基礎～脚と腕の動きの組み合わせ～ 第7回：クラシックバレエの基本レッスン～バランス～ 第8回：クラシックバレエの基本レッスン～回転動作～ 第9回：クラシックバレエの基本レッスン～跳躍動作～ 第10回：クラシックバレエの基本レッスンとコンビネーション～動きを組み合わせで踊る～ 第11回：クラシックバレエの基本レッスンとコンビネーション～フレーズ（一連の動き）を踊る～ 第12回：クラシックバレエの基本レッスンとコンビネーション～リズムに合わせて踊る～ 第13回：クラシックバレエの基本レッスンとコンビネーション～音楽に合わせて踊る～ 第14回：発表・まとめ			
テキスト 特に指定なし。必要に応じて授業中に指示する。			

参考書・参考資料等

特に指定なし。必要に応じて授業中に指示する。

学生に対する評価

授業への出席および参加態度(80%)

技術の習熟度(20%)

授業科目名： スポーツプログラム 2	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 笛木 寛 担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標 トレーニングの目的により方法が異なることを理解し、正しい方法でトレーニングを実践する能力を身につける。自分の目的（目標）に合ったトレーニング・プログラムを作成し実践する能力を身につける。			
授業の概要 トレーニング・ルームで実施できるエクササイズは、フリーウェイトやマシンを使用した筋トレ、エアロバイクやランニングなどの有酸素運動、バランスボール、ストレッチなどですが、何をどのように行うべきかはトレーニングの目的によって変わってきます。ここでいう目的とは、「筋肥大」「筋力アップ」「インナーマッスルの強化」「パワー」「体脂肪のコントロール」「柔軟性の獲得」などを指します。この授業では以下の1～3を主な内容とします。 1. 様々なトレーニングの中で最も基本となる「筋肥大」のトレーニング理論を理解し、フリーウェイトでのトレーニングスキルを身につける。 2. 自分の目的（目標）を定めてトレーニングプログラムを作成し、フリーウェイト・マシン・自体重での筋トレ、有酸素運動、バランスボールなどを実践する。 3. 体組成計での測定結果を参照しながら、トレーニングと体組成変化の関連について考察する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：ガイダンス 第2回：身体組成の把握（体組成計を使用しての測定）とトレーニングルームの使用 方法、マナー 第3回：トレーニングの基本（マシン、エアロバイク） 第4回：トレーニングの基本（フリーウェイト） 第5回：トレーニングの基本（自体重） 第6回：最大筋力の測定 第7回：筋肥大のトレーニング 第8回：負荷の設定方法（RM法） 第9回：神経系、パワー系のトレーニング 第10回：有酸素運動			

第11回：バランスボール

第12回：栄養と休養

第13回：トレーニングの評価方法

第14回：まとめ

テキスト

なし

参考書・参考資料等

必要に応じて授業中に紹介する

学生に対する評価

授業への取り組み(50%)

理論の理解(20%)

技術の習得(20%)

レポート(10%)

授業科目名： スポーツプログラム 3	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 北村 麻衣 担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標 スポーツを通して健康・体力の維持増進を図り、自身の身体への気づきや興味を持ちながら運動を楽しめるようになる。バスケットボールの基礎的な技術・戦術やルール・審判方法を学び、ゲーム運営ができるようになる。			
授業の概要 毎回新しい技術を習得し、習得した技術を試すミニゲームを多く行う。授業が進むにつれて、審判方法やテーブルオフィシャルの方法を学び、ゲーム運営ができるようにする。チーム毎に戦術を練り、練習をした上でリーグ戦を実施する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：オリエンテーション、自己紹介ゲーム、ボールに慣れる、ゴール下シュート 第2回：ボールハンドリング、ジャンプシュート、様々な種類のパス、ミニゲーム 第3回：ボールハンドリング、レイアップシュート、ドリブル、ミニゲーム 第4回：ボールハンドリング、リバウンド、ターンシュート、ミニゲーム 第5回：個人技術練習、グループ戦術①パス&カット、ミニゲーム 第6回：個人技術練習、グループ戦術②サポート行動・合わせ、ミニゲーム 第7回：個人技術練習、グループ戦術③スクリーン、ミニゲーム 第8回：アウトナンバープレイ(2on1)、審判方法の理解、ゲーム 第9回：アウトナンバープレイ(3on2)、審判方法の理解、ゲーム 第10回：チーム分け、リーグ戦に向けたチーム練習 第11回：リーグ戦①個人戦術を試す 第12回：リーグ戦②集団戦術を試す 第13回：リーグ戦③まとめ 第14回：スキルテスト、まとめ			
テキスト 適宜プリント配布			
参考書・参考資料等 なし			
学生に対する評価 技術・戦術の習得度(30%)			

グループワーク (30%)

授業参加態度 (30%)

提出物 (10%)

授業科目名： スポーツプログラム 4	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 西谷 善子 担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標 クライミングを通して、自分の身体の機能や動き等を学びながら、自らの心身と向き合い、仲間とともに生涯を通じてスポーツを楽しむ力を養うことを目標とします。			
授業の概要 クライミングは、本来自然の岩場で行われるスポーツでしたが、人工のクライミングウォールやホールド（壁についている石）の進化により、フィットネス感覚で気軽に楽しめるようになりました。また、 2016年 にはスポーツクライミングが 2020年 の夏季五輪での追加競技に承認され、より注目を集めています。 本授業では、クライミングの中の「ボルダリング」種目を中心に授業を展開し、クライミングに必要な基礎知識を学びながら、自身の身体の機能や動き等の理解を深めます。また、仲間とともに自分たちの力で楽しさとやりがいを感じ得るよう、グループワークも取り入れていきます。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：クライミング概論 第2回：クライミングの安全対策 第3回：技術；足の置き方（インサイド・アウトサイド） 第4回：技術；足の置き方（足の入れ替え） 第5回：技術；ホールドの持ち方 第6回：戦術；ルートを読む1（オブザベーションの重要性を理解する） 第7回：戦術；ルートを読む2（オブザベーションを実践する；他者の読みと自分の読みの違いを通じて戦術的思考を深める） 第8回：技術；ムーブ 第9回：応用；課題を作ってみる（ホールドの配置や登り方をイメージする） 第10回：応用；課題を作ってみる（作成した課題をもとに、グレードの種類を学習） 第11回：中間実技テスト（理解度・達成度チェック） 第12回：応用；課題を作ってみる（自身や他者の登りを分析） 第13回：実践；競技クライミング；ボルダリング（制限時間内でのトライを通じて、実戦的な対応力を養う） 第14回：実践；競技クライミング；ボルダリング（模擬コンペを実施し、これまでの			

学びを総合的に実践)
テキスト 特定のテキストは使用しませんが，必要に応じて参考資料を配布して授業を進めます。 興味がある人は『フリークライミングはじめました。 : ボルダリングから本格クライミングまで』と『スポーツクライミング ボルダリング 考える力を身につけながら楽しくレベルアップ!! 』（西谷監修）を読むと授業の様子が分かります。授業を選択する前にぜひ読んでみてください。
参考書・参考資料等 授業の中で適宜紹介する。
学生に対する評価 出席および授業参加度(60%) 理解・達成度(20%) 最終レポート(Final Report)(20%)

授業科目名： スポーツスタディ 1	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 堀江 航
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標 アダプテッドスポーツ（障害者スポーツ）への理解を深め、障害の有無にかかわらずスポーツを楽しむ能力・見識を養う。スポーツ活動を通して、コミュニケーションスキル、自己表現、リーダーシップ等、一般社会において必要とされる能力を養う。			
授業の概要 アダプテッド・スポーツの実技に加え、グループプレゼンテーションの作成、発表を実施する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：オリエンテーション 第2回：車椅子スポーツ（車椅子操作の知識と実技） 第3回：車椅子スポーツ（ドリブルの知識と実技） 第4回：車椅子スポーツ（パスの知識と実技） 第5回：車椅子スポーツ（シュートの知識と実技） 第6回：車椅子スポーツ（戦術に関する知識と実技） 第7回：車椅子スポーツまとめ（ゲームに関する知識と実技） 第8回：ゴールボールの知識と実技（競技の特性を学ぶ） 第9回：ゴールボールの実践（学んだ知識を用いて応用する） 第10回：ボッチャの知識と実技（競技の特性を学ぶ） 第11回：ボッチャの実践（学んだ知識を用いて応用する） 第12回：グループプレゼンテーション作成・発表 第13回：グループプレゼンテーション発表・相互評価 第14回：まとめ			
テキスト 使用しない。必要に応じて適宜資料を配布する。			
参考書・参考資料等 なし			
学生に対する評価 出席及び授業態度(30%)、実技(30%)、グループプレゼンテーション(30%)、ポップクイズ(10%)			

授業科目名： スポーツスタディ 2	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 小谷 実可子
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>①音楽に合わせて他者と同調させて泳ぐことにより、協調性とリズム感を養うとともに体力増強および柔軟性を高め、健やかな身体づくりに繋げる。</p> <p>②アーティスティックスイミング（AS）のベーシックに挑戦することにより、水中での幅広い身体のコントロールの技術を身につける。</p> <p>③学年や学部が違う者同士協力し合って、一つの演目を創り上げ、発表する。</p>			
授業の概要			
<p><講義></p> <p>アーティスティックスイミング（AS）の歴史とオリンピックの意義について</p> <p><実技></p> <p>学期末の発表会を目標とし、全員参加で一つの演技を創り上げる</p> <p><テスト></p> <p>筆記のみ（アーティスティックスイミング《AS》の歴史や用語）</p>			
<p><Lecture></p> <p>History of Artistic Swimming (AS) and its significance for the Olympics</p> <p><Practical skills></p> <p>All participants will create a performance together for the goal of a presentation at the end of the semester.</p> <p><Test></p> <p>Written only (Artistic Swimming 《AS》 history and terminology)</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：ガイダンスおよび健康診断			
第2回：泳力確認			
第3回：泳ぎ練習およびASの基本技術の習得（スカーリングで浮き身の練習、リズムに合わせて平泳ぎ）			
第4回：泳ぎ練習およびASの基本技術の習得（タブの形でのスカーリング、リズムに合わせてバック）			
第5回：発表用ルーティンの振り付け（複数の泳ぎを音楽に合わせる）			

<p>第6回：発表用ルーティンの振り付け（音楽に合わせた複数の泳ぎの中に、手の動作の振り付けを加える）</p> <p>第7回：発表用ルーティンの振り付け（音楽に合わせた複数の泳ぎ、手の動作の振り付けに加え、足技を入れる）</p> <p>第8回：発表用ルーティンの同調性を高める練習（プールサイドでのランドリル）</p> <p>第9回：発表用ルーティンの同調性を高める練習（音楽にカウントを付けて振り付けを繰り返し復習）</p> <p>第10回：発表用ルーティンの同調性を高める練習（カウントや振りのアドバイスなしで、自らの力だけでルーティーンを泳ぐ）</p> <p>第11回：発表用ルーティンの完遂度を高める練習（水中振り付けを一気に泳ぎ切る）</p> <p>第12回：発表用ルーティンの完遂度を高める練習（Walk Onから陸上動作を含め、水中を一気に泳ぎ切る）</p> <p>第13回：実技発表</p> <p>第14回：筆記テスト</p>
<p>テキスト</p> <p>なし</p>
<p>参考書・参考資料等</p> <p>必要に応じて授業中に紹介する</p>
<p>学生に対する評価</p> <p>水中実技への積極性と出席率(60%)</p> <p>最終テスト(40%)</p>

授業科目名： スポーツスタディ 3	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 後藤 光将
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>テニスの基本技術・ルール・マナーを理解して，ストロークラリーが20回以上続けられること，および，ダブルスゲームがプレイできるようになることを到達目標として設定します。初心者であっても，生涯にわたって楽しくテニスに親しめる基礎を養います。</p>			
授業の概要			
<p>テニスは老若男女問わず行うことができるスポーツの代表的な存在です。本授業では，テニスの基礎的技術練習を行い，ルール，歴史，競技特性を理解しながら，仲間とのコミュニケーションを深めていきます。生涯にわたってテニスを実践できる素養を学びます。</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：ガイダンス，受講ルールの説明			
第2回：送球マシンを用いた練習，ショートラリー			
第3回：送球マシンを用いた練習，フォアハンドストローク			
第4回：送球マシンを用いた練習，バックハンドストローク			
第5回：送球マシンを用いた練習，ボレー，ミニゲーム			
第6回：送球マシンを用いた練習，サービス，スマッシュ			
第7回：送球マシンを用いた練習，ハーフコートでのシングルスゲーム			
第8回：送球マシンを用いた練習，3人対3人のゲーム			
第9回：ダブルスゲームの戦術			
第10回：シングルスゲームの戦術			
第11回：ダブルスのチャンピオンゲーム（1），歴史			
第12回：ダブルスのチャンピオンゲーム（2），ルール			
第13回：ダブルスのチャンピオンゲーム（3），マナー			
第14回：ダブルスのチャンピオンゲーム（4），まとめ			
テキスト			
特に指定しません。			
参考書・参考資料等			
日本テニス協会 『テニス指導教本 I』 大修館書店 2015			
学生に対する評価			
授業に取り組む態度(40%)			

技術の向上度合 (20%)

最終レポート (Final Report) (40%)

授業科目名： スポーツスタディ 4	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 奇二 正彦／濁川 孝志
			担当形態：クラス分け・複数
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標 豊かな自然環境の中に身を置いて、自然に親しみ、種々のアウトドア・アクティビティを体験し、同時に環境問題について考える。			
授業の概要 日本有数の自然環境がいまだに残る秘境「奥只見」。ここを舞台にカヌー、トレッキング、森林の観察、河川の観察、星空の観察などを通じ、豊かな自然環境を肌で感じとる。それを前提に、日本の将来の自然環境の在り方について討議、学習する。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：オリエンテーション 第2回：キャンプにおける安全管理と危険察知 第3回：奥只見湖でカヤック体験 第4回：北の又川のトレッキング：落葉広葉樹の森で生きものの観察 第5回：中ノ又川エリアの植生観察、イヌワシ観察、天然ウォータースライダーの体験 第6回：枝折峠での雲海観察、星空観察 第7回：星空観察 第8回：中荒沢エリアでのキャンプ、焚き火、飯盒炊爨 第9回：ネイチャーゲームの体験① 第10回：ネイチャーゲームの体験② 第11回：水生生物の調査 第12回：哲学対話 第13回：講義：アウトドア・アクティビティとウエルネス 第14回：全体討論：自然環境の改善に向けて、今我々にできる事			
テキスト 足立 倫行 (著), 秋月 岩魚 (著) イワナ棲む山里 奥只見物語 世界文化社			
参考書・参考資料等 星野道夫 旅をする木 文春文庫 1993			
学生に対する評価 プログラムへの参加意欲、態度(60%)、事前課題(40%)			

授業科目名： スポーツスタディ e	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 2単位	担当教員名： 伊藤 詩織
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	体育		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>体調管理や健康の維持・増進を基本に、シェイプアップやパフォーマンスの向上を目的としたトレーニング方法の習得、そして適切な生活習慣を身につける。</p>			
授業の概要			
<p>年齢や性別，体力，運動技術にあまり関係なく，自宅で楽しむことを重視したトレーニングを実際に体験し，自分とスポーツ，健康との関係や将来の自身の健康とスポーツのあり方を考究する。講義においては，トレーニング理論や方法，生活習慣の必要性，身体の仕組みやスポーツ文化などを解説する。実技においては，ボディコンディショニング，レジスタンストレーニング，フィットネス・トレーニングを視聴し，実際に実践し，体調管理や健康の維持・増進のためにはどのような取り組みが必要なのかを学習する。授業の流れは最初に講義を視聴し，その後，実技映像を視聴し，各自実技を行う。最後に小レポート課題を作成し提出する。なお，トレーニング記録は毎週付けることとし，期末レポートと共に提出してもらう。</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：ガイダンス／講義1：運動処方			
第2回：講義2：新型コロナウイルス感染症／実技1：ボディコンディショニング①			
第3回：講義3：運動前の準備／実技2：ストレッチ&レジスタンストレーニング①			
第4回：講義4：ウォーキングとジョギングの運動効果／実技3：フィットネス・トレーニング①			
第5回：講義5：栄養と食生活／実技4：ボディコンディショニング②			
第6回：講義6：スポーツマンシップ論／実技5：ストレッチ&レジスタンストレーニング②			
第7回：講義7：身体活動のメンタルヘルスに対する影響／実技6：フィットネス・トレーニング②			
第8回：講義8：身体動作の仕組み／実技7：ボディコンディショニング③			
第9回：講義9：コンディショニングとデータサイエンス／実技8：ストレッチ&レジスタンストレーニング③			
第10回：講義10：スポーツ文化論／実技9：フィットネス・トレーニング③			
第11回：講義11：スポーツジェンダー論／実技10：ボディコンディショニング④			

第12回：講義12：海外のスポーツ文化／実技11：ストレッチ&レジスタンストレーニング④

第13回：講義13：ネイチャーキャンプへの招待／実技12：フィットネス・トレーニング④

第14回：講義14：まとめ／期末レポート作成

テキスト

特に指定なし。必要に応じて授業中に紹介する。

参考書・参考資料等

特に指定なし。必要に応じて授業中に紹介する。

学生に対する評価

毎週提出する課題(65%)

最終レポート(Final Report)(35%)

授業科目名： 英語 eラーニング	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 小池 アニータ
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>This course aims to help students become autonomous learners and develop their practical English communication ability pertaining to intercultural business context. The course also aims to raise students' TOEIC scores.</p> <p>この授業は、学生が自律的な学習者となり、異文化ビジネスの文脈における実践的な英語コミュニケーション能力を身につけることを目的としています。また、TOEICスコアの向上も目指します。</p>			
<p>授業の概要（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>Students are required to regularly study English on an e-learning platform, which offers two different courses: "Practical English 8" for regular homework assignments and "Tracker for the TOEIC (L&R)" for periodical TOEIC-based practice tests. They are required to complete the designated number of lessons in each category to build a solid foundation for the development of practical English communication ability.</p> <p>Students are also required to periodically participate in classroom learning sessions. They will meet the instructor with their assigned group members and practice speaking, writing, listening, and/or reading based on the themes related to common intercultural business scenes.</p> <p>学生は、eラーニングプラットフォームを活用して定期的に英語学習を行う必要があります。このプラットフォームには2つのコースがあり、1つは通常の宿題としての「Practical English 8」、もう1つは定期的なTOEIC形式の模擬試験を行う「Tracker for the TOEIC (L&R)」です。学生は、それぞれのカテゴリーで指定されたレッスン数を修了し、実践的な英語コミュニケーション能力の基礎を築く必要があります。</p>			
<p>授業計画</p> <p>第1回：Course Introduction</p> <p>Syllabus Review Introduction to Practical English 8 & Tracker for TOEIC L&R</p> <p>第1回：コース紹介</p> <p>シラバス復習 TOEIC L&R 実践英語8&トラッカー入門</p>			

第2回 : Group Lesson 1: Business Meetings (Group A)
 第2回 : グループレッスン1 : 商談 (Aグループ)
 第3回 : Group Lesson 1: Business Meetings (Group B)
 第3回 : グループレッスン1 : 商談 (Bグループ)
 第4回 : Group Lesson 1: Business Meetings (Group C)
 第4回 : グループレッスン1 : 商談 (Cグループ)
 第5回 : Group Lesson 1: Business Meetings (Group D)
 第5回 : グループレッスン1 : 商談 (Dグループ)
 第6回 : Group Lesson 2: Job Interviews (Group A)
 第6回 : グループレッスン2 : 就職面接 (Aグループ)
 第7回 : Group Lesson 2: Job Interviews (Group B)
 第7回 : グループレッスン 2 : 就職面接 (Bグループ)
 第8回 : Group Lesson 2: Job Interviews (Group C)
 第8回 : グループレッスン 2 : 就職面接 (Cグループ)
 第9回 : Group Lesson 2: Job Interviews (Group D)
 第9回 : グループレッスン2 : 就職面接 (Dグループ)
 第10回 : Group Lesson 3: Talking about products (Group A)
 第10回 : グループレッスン3 : 商品について話す (Aグループ)
 第11回 : Group Lesson 3: Talking about products (Group B)
 第11回 : グループレッスン3 : 商品について話す (Bグループ)
 第12回 : Group Lesson 3: Talking about products (Group C)
 第12回 : グループレッスン3 : 商品について話す (Cグループ)
 第13回 : Group Lesson 3: Talking about products (Group D)
 第13回 : グループレッスン3 : 商品について話す (Dグループ)
 第14回 : Course Evaluation, Self Evaluation, Introduction to other e-learning platforms
 第14回 : コース評価、自己評価、他のeラーニングプラットフォームの紹介

テキスト

There is no required textbook for this course. All the learning materials are Web-based, and can be accessed on the Internet both on campus and at home. Supplementary materials may be shared via Canvas LMS.

この授業では教科書は使用しません。すべての教材はWebベースで、キャンパス内外のインターネット環境からアクセス可能です。補助教材はCanvas LMSを通じて共有されることがあります。

参考書・参考資料等

なし

学生に対する評価

Class Participation(30%)

授業への参加(30%)

Homework Assignments (e-learning)(50%)

宿題(e-learning) (50%)

Diagnostic Test(5%)

診断テスト(5%)

Three TOEIC Practice Tests(15%)

TOEIC模擬テスト3回(15%)

授業科目名： 英語ディスカッション	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 村野 緑
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>The course aims to help students improve academic discussion skills, develop fluency, and build communication skills in English.</p> <p>この授業は、学生がアカデミックなディスカッションスキルを向上させ、英語での流暢さとコミュニケーション能力を高めることを目的としています。</p>			
授業の概要			
<p>Throughout the course, students should be able to hold discussions in groups of three to five students for 12-20 minutes. The discussion will be balanced and interactive, and constructed by all participants. Over the course, students will develop into competent and confident communicators who share their own opinions and value the opinions of others.</p> <p>授業を通じて、学生は3～5人のグループで12～20分間のディスカッションを行えるようになります。ディスカッションは全員が参加し、バランスの取れたインタラクティブなものとなります。授業を重ねることで、学生は自分の意見を共有し、他者の意見を尊重する、有能で自信に満ちたコミュニケーターへと成長していきます。</p>			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：Course Introduction Introduction of all Communication Skills			
第1回：授業紹介／すべてのコミュニケーションスキルの紹介			
第2回：The Importance of Communication Opinions			
第2回：コミュニケーションの重要性／意見の述べ方			
第3回：Entering University Supporting Opinions			
第3回：大学入学について／意見の裏付け			
第4回：Life at University Follow-up Questions			
第4回：大学生活／フォローアップの質問			
第5回：Becoming Independent Review: Comprehension Discussion Test 1			
第5回：自立すること／理解力の復習／ディスカッションテスト①			
第6回：Living Abroad Connecting Ideas			
第6回：海外での生活／アイデアのつなげ方			
第7回：The Globalization of Japanese Culture Joining a Discussion			

第7回：日本文化のグローバル化／ディスカッションへの参加方法
 第8回：Japanese and Foreign Customs Changing Topics
 第8回：日本と外国の習慣／話題の切り替え方
 第9回：Learning a Foreign Language Review: Paraphrasing
Discussion Test 2
 第9回：外国語学習／言い換えの復習／ディスカッションテスト②
 第10回：Entering the Workforce Different Viewpoints
 第10回：就職について／異なる視点の理解
 第11回：Social Media Balancing Opinions
 第11回：ソーシャルメディア／意見のバランスの取り方
 第12回：Public Behavior Sources of Information
 第12回：公共の場での行動／情報源の活用
 第13回：Social Issues Review: Clarification Discussion Test 3
 第13回：社会問題／明確化の復習／ディスカッションテスト③
 第14回：Review of all topics Review of all skills
 第14回：すべてのトピックとスキルの復習

テキスト

What's Your Opinion? Book 1 DTP 2024

What's Your Opinion? Book 2 DTP 2024

参考書・参考資料等

なし

学生に対する評価

Quizzes or reaction paper(10%)

クイズまたはリアクションペーパー：10%

Participation(60%)

授業参加：60%

Discussion Tests(30%)

ディスカッションテスト：30%

授業科目名： 英語ディベート	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 山岡 眞希子
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>The aims of this course are to understand the nature and structures of debate in English, to develop critical thinking skills by analyzing and formulating arguments on issues from multiple perspectives, and to learn how to respond to questions through the development of research skills.</p> <p>この授業の目的は、英語におけるディベートの本質と構造を理解すること、さまざまな視点から問題を分析し、主張を構築することで批判的思考を養うこと、そしてリサーチスキルを通じて質問に対応する力を身につけることです。</p>			
<p>授業の概要</p> <p>In the framework of academic (educational) debate, students will learn how to build persuasive and logical arguments, and how to cross-examine, rebut, and refute the arguments of opponents. By actively engaging in interesting and challenging academic issues, students will develop their critical thinking, logical thinking, research, and cooperative team-building skills.</p> <p>アカデミック（教育的）ディベートの枠組みの中で、学生は説得力があり論理的な主張の構築方法、相手の主張に対する反対尋問・反論・反駁の仕方を学びます。興味深く、かつ挑戦的な学術的テーマに積極的に取り組むことで、学生はクリティカル・シンキング、論理的思考、調査能力、そして協働的なチームビルディングスキルを高めていきます。</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：Introduction Debate terminologies & structure Discussion Skill review 第1回：導入 ディベート用語と構成 ディスカッションスキルの復習</p> <p>第2回：Food I Types of evidence Constructing arguments I 第2回：食べ物 I 証拠の種類 主張の構築 I</p> <p>第3回：Food II Research: Finding & using sources Constructing arguments II 第3回：食べ物 II リサーチ：情報源の探し方と活用法 主張の構築 II</p> <p>第4回：Environment I Cross examination Questioning 第4回：環境 I 反対尋問 質問の仕方</p> <p>第5回：Environment II Weaknesses of arguments Rebutting Begin to prepare for Mid-</p>			

term Debate

第5回：環境 II 主張の弱点 反論の仕方 中間ディベートの準備開始

第6回：Technology I Note-taking Summarizing

第6回：テクノロジー I ノートの取り方 要約の仕方

第7回：Technology II Judging a debate

第7回：テクノロジー II ディベートの評価方法

第8回：Mid-term Debate, Debate Reaction & Reflection

第8回：中間ディベート、ディベートの振り返りと感想

第8回、第9回の授業ではチーム毎に週替わりでディベート行います。ディベート行うチームはディベート終了後、反省会を開き、チーム毎に改善点などをまとめたレポートを作成します。ディベートを行わないチームは、ディベートのオブザーバーとしてノートテイキングをしながら内容理解に努め、指定されたルーブリックを用いて、ディベートの質をジャッジする活動を行います。その後、ジャッジしたディベートに関して感想文を作成し提出します。

第9回：Mid-term Debate, Debate Reaction & Reflection

第9回：中間ディベート、ディベートの振り返りと感想

第8回、第9回の授業ではチーム毎に週替わりでディベート行います。ディベート行うチームはディベート終了後、反省会を開き、チーム毎に改善点などをまとめたレポートを作成します。ディベートを行わないチームは、ディベートのオブザーバーとしてノートテイキングをしながら内容理解に努め、指定されたルーブリックを用いて、ディベートの質をジャッジする活動を行います。その後、ジャッジしたディベートに関して感想文を作成し提出します。

第10回：Gender review of all skills begin to prepare for Final Debate

第10回：ジェンダー すべてのスキルの復習 期末ディベートの準備開始

第11回：Media of all skills preparation for Final Debate

第11回：メディア I すべてのスキルの復習 期末ディベートの準備

最終ディベートの準備では、議論の構成と根拠のリサーチを行います。また議論の構成と根拠の提示に関わるフレーズの復習と、より洗練されたフレーズを学習します。

第12回：Media II review of all skills preparation for Final Debate

第12回：メディア II すべてのスキルの復習 期末ディベートの準備

最終ディベートの準備では、反対尋問、反駁、ディベートの要約の準備を行います。また反対尋問、反駁及び議論の要約に関わるフレーズの復習と、より洗練されたフレーズを学習します。

第13回：Final Debate, Debate Reaction & Reflection

第13回：期末ディベート、ディベートの振り返りと感想

第13回、第14回の授業ではチーム毎に週替わりでディベート行います。ディベート行うチームはディベート終了後、反省会を開き、チーム毎に改善点などをまとめたレポートを作成します。ディベートを行わないチームは、ディベートのオブザーバーとしてノートテイキングをしながら内容理解に努め、指定されたルーブリックを用いて、ディベートの質をジャッジする活動を行います。その後、ジャッジしたディベートに関して感想文を作成し提出します。

第14回: Final Debate, Debate Reaction & Reflection

第14回: 期末ディベート、ディベートの振り返りと感想

第13回、第14回の授業ではチーム毎に週替わりでディベート行います。ディベート行うチームはディベート終了後、反省会を開き、チーム毎に改善点などをまとめたレポートを作成します。ディベートを行わないチームは、ディベートのオブザーバーとしてノートテイキングをしながら内容理解に努め、指定されたルーブリックを用いて、ディベートの質をジャッジする活動を行います。その後、ジャッジしたディベートに関して感想文を作成し提出します。

テキスト

Center for Foreign Language Education and Research UP FOR DEBATE Kinseido
2024

参考書・参考資料等

なし

学生に対する評価

Participation (including assignments)(40%)

参加 (課題を含む) (40%)

Mid-term debate preparatory assignments(15%)

中間ディベート準備課題(15%)

Mid-term debate(15%)

中間ディベート(15%)

Final debate preparatory assignments(15%)

最終ディベート準備課題(15%)

Final debate(15%)

最終ディベート(15%)

授業科目名： 英語プレゼンテーション	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 山崎 陽子
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
授業のテーマ及び到達目標			
<p>This course is designed primarily to improve students' presentation skills and there by their speaking, reading, and listening skills as well. Students will learn basic presentation skills.</p> <p>この授業は、学生のプレゼンテーションスキルを向上させることを主な目的とし、それに伴ってスピーキング、リーディング、リスニングの能力も高めることを目指します。学生は基本的なプレゼンテーションスキルを学びます。</p>			
授業の概要			
<p>The following list provides the minimum requirements for students in Presentation Classes. The degree and sophistication of each skill taught will depend on the class, class level and teacher, but the elements listed in 3 below, and the number and type of presentations listed in 1 and 2 should be covered in class.</p> <p>1. Number of Presentations</p> <p>1) At least one individual mini presentation (approximately 2 min) or one group presentation (2 min per speaker)</p> <p>2) A final individual presentation (level 2: 6 min, level 3: 5 min, level 4: 4 min)</p> <p>*Please note: Reading presentation drafts is not allowed for any presentations. Students are allowed only to look at cue cards or PowerPoint slides / notes.</p> <p>2. Contents of the Final Presentation</p> <p>1) Level 2: persuasive speech with at least some research</p> <p>2) Levels 3 & 4: informative or persuasive speech (depending on ability)</p> <p>3. Teaching Elements</p> <p>1) Structural elements</p> <p>a. Organization of a presentation (introduction/body/conclusion)</p> <p>b. The elements of each part: introduction/body/conclusion</p> <p>c. Transitions and sequencers</p> <p>d. Making outlines/cue cards</p>			

It is most important that students have a clear grasp of these aspects of making a presentation.

2) Physical elements

- a. Posture
- b. Voice – volume, clarity, inflection
- c. Eye contact
- d. Gestures

3) Visual elements

a. How to make effective visuals

- i. Content-visual relationship
- ii. Level 2: making concise, audience-friendly visuals (including graphs and tables) – use of PowerPoint recommended (Please note the Media Center provides lessons on and help with PowerPoint. Therefore, teachers do not have to teach the basics of PowerPoint in class)

Levels 3 & 4: making concise, audience friendly visuals (graphs and tables not required)

b. Using visuals effectively

- i. Level 2: How to use visuals and how to explain graphs and tables
- ii. Levels 3 & 4: How to use visuals

The textbooks cover most of these elements and should be used extensively to develop the mechanics and skills of speech making.

Final Presentation

The topic of the final presentation may be one of the topics used in class, one assigned by the teacher, or one chosen by the student (with teacher approval). The presentation will focus on organizing information clearly and effectively. Level 2 students could also include material and information obtained through independent research on their topic and be encouraged to make a persuasive rather than a factual speech. Levels 3 & 4 may limit themselves to informative or persuasive speeches at the discretion of the instructor. This must be an individual presentation.

Instructors should evaluate students based on clearly defined criteria such as eye contact, clarity, use of specific examples/data to support their opinions, effort, enthusiasm for their topics, clear structure, etc.

以下は、プレゼンテーションクラスにおける最低限の要件です。各スキルの指導の深さや難易度は、クラスのレベルや担当教員によって異なりますが、以下の3項目に記載された要素、および1・2項目に記載されたプレゼンテーションの回数と種類は授業内で扱われます。

1. プレゼンテーションの回数

少なくとも1回の個人ミニプレゼンテーション（約2分）または1回のグループプレゼンテーション（1人あたり約2分）

最終個人プレゼンテーション（レベル2：6分、レベル3：5分、レベル4：4分）

※注意：いずれのプレゼンテーションでも原稿の読み上げは禁止です。キューカードやPowerPointスライド／ノートの参照のみ許可されます。

2. 最終プレゼンテーションの内容

レベル2：ある程度のリサーチを含む説得型スピーチ

レベル3・4：能力に応じて、情報提供型または説得型スピーチ

3. 指導内容

1) 構成要素

プレゼンテーションの構成（導入／本論／結論）

各パートの要素

つなぎ表現と順序付け

アウトラインやキューカードの作成

→ これらの要素を明確に理解することが最も重要です。

2) 身体的要素

姿勢

声（音量、明瞭さ、抑揚）

アイコンタクト

ジェスチャー

3) 視覚的要素

効果的なビジュアルの作成方法

内容とビジュアルの関係

レベル2：簡潔で聴衆に優しいビジュアル（グラフや表を含む）を作成すること。PowerPointの使用が推奨されます（メディアセンターでPowerPointの使い方の指導が受けられるため、授業内での指導はおこないません）

レベル3・4：簡潔で聴衆に優しいビジュアル（グラフや表は必須ではありません）

ビジュアルの効果的な使い方

レベル2：ビジュアルの使い方、グラフや表の説明方法

レベル3・4：ビジュアルの使い方

教科書にはこれらの要素の多くが含まれており、スピーチスキルの習得に活用されます。

最終プレゼンテーションのトピックは、授業内で扱ったテーマ、教員が指定したテーマ、または学生が選んだテーマ（教員の承認が必要）から選びます。プレゼンテーションでは情報を明確かつ効果的に整理することに重点を置きます。レベル2の学生は、独自のリサーチによる資料や情報を含め、事実の提示よりも説得を重視したスピーチを行うことが推奨されます。レベル3・4の学生は、教員の判断により情報提供型または説得型スピーチのいずれかを選択します。これは個人プレゼンテーションでなければなりません。

教員は、アイコンタクト、明瞭さ、具体例やデータの使用、努力、トピックへの熱意、構成の明確さなど、明確に定義された評価基準に基づいて学生を評価します。

授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）

第1回：Orientation

第1回：オリエンテーション

第2回：Presentation skill 1: Physical elements 1

第2回：プレゼンテーションスキル①：身体的要素①

英語でのプレゼンテーションに必要なボディランゲージ、特にハンドジェスチャーを中心とした学習を行います。

第3回：Presentation skill 2: Physical elements 2

第3回：プレゼンテーションスキル②：身体的要素②

英語でのプレゼンテーションに必要なボディランゲージ、特にプレゼンテーション時の立ち位置や観客へのアイコンタクトの重要性を学習します。

第4回：Mini-presentation 1

第4回：ミニプレゼンテーション①

学生個々の興味に基づいてトピックを選定し、これまでの授業で学習した基本的なフレーズを用いてプレゼンテーションの練習を行います。

第5回：Presentation skill 3: How to make effective visuals

第5回：プレゼンテーションスキル③：効果的なビジュアルの作成

第6回：Presentation skill 4: Using visuals effectively

第6回：プレゼンテーションスキル④：ビジュアルの効果的な使い方

第7回：Presentation skill 5: Making cue cards

第7回：プレゼンテーションスキル⑤：キューカードの作成

第8回：Mini-presentation 2

第8回：ミニプレゼンテーション②

学生個々の興味に基づいてトピックを選定し、これまでの授業で学習した多様なフレーズを用いてプレゼンテーションの練習を行います。

第9回：Presentation skill 6: Organization of a presentation

第9回：プレゼンテーションスキル⑥：プレゼンテーションの構成

第10回：Presentation skill 7: The elements of each part

第10回：プレゼンテーションスキル⑦：各パートの要素

効果的なプレゼンテーションを行う上での流れを復習します。特に、序論、本論、結論の構成と、それぞれのパートで必要となる英語のフレーズを学習します。

第11回：Presentation skill 8: The elements of each part

第11回：プレゼンテーションスキル⑧：各パートの要素

効果的なプレゼンテーションを行う上でのスライド（ビジュアルエイド）の作成について復習します。画像の使用や、1スライドにおけるテキストの適切な量や第10回の授業で行った序論、本論、結論の内容がより効果的に伝わるようスライドのデザインやレイアウトなどを学習します。

第12回：Review of presentation skills

第12回：プレゼンテーションスキルの復習

第13回：Final presentations

第13回：最終プレゼンテーション

最終プレゼンテーションでは、クラスを2グループに分け（グループA、グループB）、グループAに属するメンバーが個々にプレゼンテーションを行います。プレゼンテーションを行わないグループは個々でクラスメートのプレゼンテーションに対する感想文を提出します

第14回：Final presentations

第14回：最終プレゼンテーション

第13回でプレゼンテーションを行わなかったグループメンバーが個々にプレゼンテーションを行います。プレゼンテーションを行わないグループは個々でクラスメートのプレゼンテーションに対する感想文を提出します。

テキスト

For textbook information, check the title of your textbook on the Academic Affairs Division Bulletin Board.

教科書のタイトルについては、教務部掲示板で確認してください

参考書・参考資料等

To be announced in class if necessary

必要に応じて授業内にて発表する

学生に対する評価

participation(30%)

授業参加 : 30%

class activities(40%)

授業内活動 : 40%

final presentation(30%)

最終プレゼンテーション : 30%

授業科目名： 英語リーディング& ライティング	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 三島 雅一
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>By the end of the semester, students will:</p> <p>learn essential reading strategies such as skimming, scanning, and annotating.</p> <p>learn essential writing strategies such as prewriting, drafting, revising, and proofreading.</p> <p>improve academic writing skills through writing paragraph/multiparagraph level essays in various discourse genres.</p> <p>practice writing to improve accuracy, fluency, and complexity.</p> <p>develop receptive as well as productive vocabulary knowledge essential for reading and writing academic texts.</p> <p>learn to use Word or equivalent software to compose academic texts.</p> <p>学期末までに学生は、スキミング（概要読み）、スキヤニング（特定情報の検索）、注釈付けなどの基本的な読解戦略を学ぶ</p> <p>プレライティング（構想）、ドラフティング（下書き）、リバイジング（推敲）、プルーフリーディング（校正）などの基本的なライティング戦略を学ぶ</p> <p>段落レベルおよび複数段落レベルのエッセイをさまざまな文体で書くことで、アカデミックライティングスキルを向上させる</p> <p>正確さ、流暢さ、複雑さを高めるためのライティング練習を行う</p> <p>アカデミックな文章の読解と執筆に必要な語彙力（受容的語彙と産出的語彙）を身につける</p> <p>Wordや同等のソフトウェアを使ってアカデミックな文章を作成する方法を学ぶ</p>			
<p>授業の概要</p> <p>Students will learn the different genres of writing in the university such as Summary Writing, Descriptive Essay, Opinion Essay, Explanatory Essay, Analytical Essay, and/or Argumentative/Persuasive Essay.</p> <p>学生は大学で必要とされるさまざまなライティングのジャンルを学びます。</p> <p>例：要約文、描写的エッセイ、意見文、説明文、分析的エッセイ、論証・説得型エッセイ</p>			
<p>授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）</p> <p>第1回：Course Orientation</p> <p>第1回：コースオリエンテーション</p>			

第2回 : How to Write a Book Report & Reading Strategy 1: Skimming

第2回 : 本のレポートの書き方 & リーディング・ストラテジー① : スキミング

第3回 : Book Report: Peer Feedback & Discussion, Book Report Presentation Prep

第3回 : 本のレポート : ピア・フィードバックとディスカッション、本のレポート発表準備

第4回 : Book Report Presentation

第4回 : 本のレポート発表

第5回 : Summary Writing I (What is an Informational Summary?) & Reading Strategy 2: Scanning

第5回 : 約文ライティング I (インフォメーション・サマリーとは?) & リーディング・ストラテジー② : スキャニング

第6回 : Summary Writing II (What is the Language of Summary?)

第6回 : 要約文ライティング II (要約に使われる言語とは?)

第7回 : Summary Writing III (How is an Informal Summary structured?)

第7回 : 要約文ライティング III (インフォーマルな要約の構成方法)

第8回 : Summary Writing Presentation & Reflection

第8回 : 要約文発表 & 振り返り

第9回 : Opinion Essay Writing I (What is Opinion Essay?) & Writing Strategy 1: Prewriting and 2: Drafting & Reading Strategy 3: Annotating

第9回 : 意見エッセイライティング I (意見エッセイとは?) & ライティング・ストラテジー① : プレライティング、② : ドラフティング & リーディング・ストラテジー③ : アノテーション

第10回 : Opinion Essay Writing II (Constructing an Opinion) & Writing Strategy 3: Revising

第10回 : 意見エッセイライティング II (意見の構築) & ライティング・ストラテジー③ : リバイジング

第11回 : Opinion Essay Writing III (How to use sources effectively)

第11回 : 意見エッセイライティング III (情報源を効果的に使うには)

第12回 : Opinion Essay Writing IV (How to logically organize an opinion essay & how to avoid plagiarism) & Writing Strategy 4: Proofreading

第12回 : 意見エッセイライティング IV (意見エッセイの論理的な構成方法 & 剽窃を避ける方法) & ライティング・ストラテジー④ : プルーフリーディング

第13回 : Final Presentation (Group 1)

第13回 : 最終プレゼンテーション (グループ1)

第14回 : Final Presentation (Group 2) & Course Reflection (All students)

第14回 : 最終プレゼンテーション (グループ2) & コースの振り返り (全員)

テキスト

所属クラスによってテキストは異なります。

詳細は学期始めの全学共通科目の掲示板及びテキスト販売のWEBサイトをご確認ください。

参考書・参考資料等

なし

学生に対する評価

Quizzes or reaction paper(10%)

クイズまたはリアクションペーパー：10%

Participation(60%)

授業参加：60%

Discussion Tests(30%)

ディスカッションテスト：30%

授業科目名： ドイツ語	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 佐藤 修司
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
授業のテーマ及び到達目標 1クラス20名程度の学習環境で、一人一人のドイツ語での表現力（CEFR A1レベル程度）を養うことを目的とする。			
授業の概要 初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：イントロダクションLektion 1：アルファベット／動詞の現在人称変化（1人称・2人称）／平叙文・補足疑問文／動詞の位置 第2回：Lektion 1：挨拶／自己紹介（名前・出身地・居住地・専攻）／国名・専攻 第3回：Lektion 2：動詞sein／並列の接続詞／応答表現（ja/nein/doch）自己紹介（職業・国籍）／国名 第4回：Lektion 3：動詞の現在人称変化（3人称）／人物を表す形容詞自己紹介（年齢）／他者紹介／数詞（0～100）／言語名 第5回：Lektion 4：名詞の性／定冠詞・不定冠詞（主格・対格）／不規則動詞の現在人称変化①／評価を表す副詞 第6回：Lektion 4：レストランでの会話／食べ物・飲み物／身の回りにある持ち物／形・質・色を表す表現 第7回：Lektion 5：人称代名詞（主格・対格）／名詞の複数形 第8回：Lektion 5：住まい・家具／値段を聞く表現／数詞（100～100万） 第9回：Lektion 6：所有冠詞と否定冠詞（主格・対格）／家族／持ち物② 第10回：Lektion 7：不規則動詞の現在人称変化II 第11回：Lektion 7：趣味／余暇活動／頻度の表現／曜日 第12回：Lektion 8：所有冠詞と人称代名詞（与格） 第13回：Lektion 8：贈り物／身に付ける物／数詞（101～） 第14回：最終テスト（口頭）			
テキスト 新倉真矢子・正木晶子・中野有希子 『シュピッツェ！ 1 コミュニケーションで学ぶド			

イツ語』 朝日出版社 2024
参考書・参考資料等 授業中に説明する。
学生に対する評価 課題(20%) 小テスト(30%) 口頭テスト(40%) 授業参加度(10%)

授業科目名： フランス語	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 大磯 仁志
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
授業のテーマ及び到達目標 1クラス20名程度の学習環境で、一人一人のフランス語での表現力（CEFR A1レベル程度）を養うことを目的とする。			
授業の概要 初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：発音・つづり字記号 第2回：挨拶の会話 第3回：疑問文と否定文 第4回：自己紹介 第5回：提案をする 第6回：家族について話す 第7回：予定を尋ねる 第8回：近接未来と近接過去を使った会話 第9回：住んでいる場所について話す 第10回：複合過去を使った会話 第11回：体調について話す 第12回：単純未来を使った会話 第13回：休暇の計画について語る 第14回：最終テスト			
テキスト 関未玲他 『サ・マルシュ？（改訂版）』 駿河台出版社 2024			
参考書・参考資料等 初心者向けの紙媒体の辞書。『ディコ仏和辞典』（白水社），『プログレッシブ仏和辞典』（小学館），『クラウン仏和辞典』（三省堂）など。			
学生に対する評価 授業への参加度(50%)			

最終テストを含む各種テストや提出物(50%)

授業科目名： スペイン語	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 西村 亜希子 担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
授業のテーマ及び到達目標 1クラス20名程度の学習環境で、一人一人のスペイン語での表現力（CEFR A1レベル程度）を養うことを目的とする。			
授業の概要 初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する） 第1回：Unidad 1 挨拶をする 第2回：Unidad 1 自己紹介する、国籍や年齢、職業について話す・書く 第3回：Unidad 1 授業によく出てくる表現を使ってみる 第4回：Unidad 2 日常の習慣や行動について話す・書く 第5回：Unidad 2 予定や頻度について話す・書く 第6回：Unidad 2 誕生日や時間・時刻を尋ねる・言う 第7回：復習：クラスの状況に応じて多少の前後あり 第8回：Unidad 3 住居や家族について話す・書く 第9回：Unidad 3 人の居場所や物の在処、所有者について話す・書く 第10回：Unidad 4 街や地域について話す・書く 第11回：Unidad 4 住所や場所に関する情報のやりとりをする 第12回：Unidad 5 好みを伝える、意見の一致・不一致を表現する 第13回：Unidad 5 提案したり勧めたりする 第14回：まとめと復習：クラスの状況に応じて多少の前後あり			
テキスト García Santos, Juan Felipe ほか 『エレラボA1-A2』 朝日出版社 2020			
参考書・参考資料等 上田博人『スペイン語文法ハンドブック』 研究社 2011 高垣敏博『CDブック これなら覚えられる！スペイン語単語帳』 NHK出版 2009 吉田理加『キクタン スペイン語【入門編】』アルク 2011 吉田理加『キクタン スペイン語【初級編】』アルク 2013			

学生に対する評価

課題・小テスト・授業参加度等 (60%)

統一課題 (作文・口頭テスト) (40%)

授業科目名： 中国語	教員の免許状取得のための 選択科目	単位数： 1単位	担当教員名： 林 松涛
			担当形態：クラス分け・単独
科 目	第66条の6に定める科目		
施行規則に定める 科目区分又は事項等	外国語コミュニケーション		
授業のテーマ及び到達目標			
1クラス 20 名程度の学習環境で、一人一人の中国語での表現力（CEFR A 1 レベル程度）を養うことを目的とする。			
授業の概要			
初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す。			
授業計画（本学の授業時間は各回100分で実施する）			
第1回：第1課 発音一 ピンイン 声調 単母音			
第1回：第1課 発音1 ピンイン 声調 単母音			
第2回：第2課 発音二 複母音 子音			
第2回：第2課 発音2 複母音 子音			
第3回：第3課 発音三 鼻母音			
第3回：第3課 発音3 鼻母音			
第4回：第4課 発音四 軽声 変調 儿化音			
第4回：第4課 発音4 軽声 変調 儿化音			
第5回：第5課 我的一天			
第5回：第5課 私の日			
第6回：第6課 吃饭			
第6回：第6課 食事をする			
第7回：复习1			
第7回：復習1			
第8回：第7課 买东西			
第8回：第7課 買い物をする			
第9回：第8課 在动物园			
第9回：第8課 動物園で			
第10回：第9課 校园生活			
第10回：第9課 学校生活			
第11回：第10課 来大学			

第11回：第10課 大学に来る
第12回：第11課 兴趣爱好
第12回：第11課 趣味
第13回：第12課 我感冒了
第13回：第12課 風邪をひきました
第14回：复习2
第15回：復習2

テキスト

立教大学中国語教育研究室 『春雨鐘聲』 駿河台出版社 2024

参考書・参考資料等

なし

学生に対する評価

授業参加度(20%)

授業時に行う小テスト、課題(40%)

学期末に行う中国語統一課題(40%)